

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2011

8

ISSN 1340-8917



特集 ■ 産業観光によるまちづくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

産業観光によるまちづくり

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 4 「産業観光」をまちづくりの原動力に | 須田 寛（東海旅客鉄道株式会社 相談役） |
| 8 北海道釧路市 地域産業活かし滞在型メニュー開発 | 石田貴志 |
| 10 岩手県盛岡市 〴〵見る・触れる・作る、で地場産業振興 | 佐々木雷蔵 |
| 12 神奈川県川崎市 工場夜景がネットで一躍脚光 | 御簾納 誠 |
| 14 富山県黒部市 広域連携で観光資源をネットワーク化 | 小林聖子 |
| 16 長野県岡谷市 「産業」を観光資源の主役に | 編集部 |
| 18 静岡県浜松市 グローバル企業とも連携した産業観光 | 石川 淳 |
| 20 愛知県名古屋 産業観光バスが誘客・送客に威力 | 小宅一夫 |
| 22 岐阜県大垣市 西美濃の「ものづくり力」を発信 | 堀 富士夫 |
| 24 兵庫県姫路市 姫路城修理で〴〵匠の技、を観光資源に | 柿本英夫 |
| 26 広島県呉地域 ものづくり技術の魅力を再発見 | 濱下英樹 |
| 28 福岡県北九州市 工場見学から環境エコ施設まで多彩 | 高宮祐二 |
| 30 地域の魅力を内包する産業観光資源 | 牧野博明（財団法人日本交通公社 企画課長） |
| 34 観光立国目指し関係府省も振興策 | 観光庁・経済産業省 |

佐渡島と能登を「世界農業遺産」認定

- | | | | |
|----------------------|------|-----------------------------------|------------|
| 38 トキと共生する佐渡の里山（新潟県） | 西牧孝行 | 46 首長の思い
「市民力」を活かした、元気がでるまちづくり | 坂井俊之（唐津市長） |
| 39 能登の里山里海（石川県） | 川畑瑞恵 | | |

レギュラーレポート

- | | | |
|--|------|-----------|
| 40 合併市町村住民組織活性化支援事業（大分県由布市）
地域に残る歴史遺跡を活かして | 二宮明久 | 48 センター通信 |
| 42 地域づくり団体探訪
種蔵を守り育む会
石積みの棚田と板倉を活かしたまちづくり 岐阜県飛騨市 | | |
| 44 ～北から南から～ 千葉市花見川区
お墓参りの奨励策にポイント付与 | | |

グラフィア

- 2 産業観光によるまちづくり
- 47 手前みそですが… 【山形県酒田市】



多くの市民らが華やかな花火を観賞

表紙
福井フェニックス花火

（福井県福井市）

今年で五十八回目となる「福井フェニックスまつり」は、震災、震災、水害などを克服し、復興を成し遂げたことを祈念したまつり。

それを華やかに彩るのが「福井フェニックス花火」だ。夏の風物詩として、また中心部で開催される「花火」として、多くの人に親しまれている。

東日本大震災の影響により、各地で自粛ムードが漂う中、「福井から元気を届けよう！」との思いを込めて、今年も福井フェニックスまつりのオープニングとして、八月五日（金）に開催する。

今回は、震災地への応援企画と、NHK大河ドラマで注目を浴びている「茶々初・江」をイメージしたオリジナル企画を盛り込んだ花火となっている。

また、祈りの架け橋（チャイナガラ）・躍動感あるウェーブ花火と、盛りだくさんのプログラムでお届けする。

（写真提供：福井県福井市）



宮崎県知事 ● 河野俊嗣

みやざき新生！ 明日のみやざきの礎づくり

はじめに、東日本大震災において、お亡くなりになられた方々に心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災された方々にお見舞いを申し上げます。

本県は、昨年来の口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザ、新燃岳噴火の発生に際し、今回の被災地をはじめ全国から心温まる御支援・御協力を賜り、再生・復興に向けた大きな勇気と励ましをいただきました。これまでの御厚情に対する深い感謝と恩返し的气持を込め、被災地や被災者の方々をでき得る限り支援したいという県民の皆様の思いを一つにして、現在、県民一体となった取組を行っていく「みやざき感謝プロジェクト」として、宮崎県産スギ材で製作した学童机・椅子の寄贈、「みやざき県民復興協力隊」の派遣、中山間地域における被災者の受入支援等を行っております。

さて、私が今年一月に宮崎県知事に就任してから、まもなく半年を迎えようとしています。本県の基本政策としては、「危機事象への対応と再生・復興」を進めるとともに、明日の宮崎のための礎づくりとして、「産業・雇用づくり」「人財づくり」「くらしづくり」を進めてまいります。

まず、一点目として「危機事象への対応と再生・復興」ですが、本県では昨年四月に口蹄疫が発生し、その後、高病原性鳥インフルエンザ、さらに、新燃岳の噴火が、また、県外では東日本大震災が起きました。こうした危機事象に対して、「常在危機（常に危機は存在している）」の意識を徹底し、県民の安全・安心を確保するとともに、口蹄疫等で被害を受けた本県の再生・復興を目指します。

次に、二点目として「産業・雇用づくり」ですが、日本経済が長期低迷している中、本県は、口蹄疫等の影響により経済活動が一段と落ち込んでいることから、早期の経済回復を図ることが重要です。県内での消費拡大など地域の経済活動を活性化させるとともに、地域資源や

強みを生かした産業の振興を図り、雇用の確保・拡大を目指します。

具体的には、農工商連携、六次産業化等の促進による力強く成長性の高い「食」産業の構築、四年間で新規企業立地百件及び雇用創出五千人を目指す戦略的な企業誘致、環境・エネルギー分野や医療など新たな成長産業の育成など、「本県の強みや特性を活かした力強い地域産業の育成」に取り組んでまいります。

加えて、民間と行政が一体となった「オールみやざき営業チーム」の結成や、地域の特徴・魅力を生かした体験型ツーリズムの促進、地域資源の発見と地域間交流を促進する「宮崎を知らう！百万泊県民運動」の提唱、南九州各県と連携した観光誘致活動の展開等による「観光・物産等の総合的な販売促進」にも取り組んでまいります。

さらに、三点目として「人財づくり」ですが、現在、私たちが直面している様々な課題を解決し、希望ある未来を築いていくための最大の財産は人です。特に、地域の宝である子どもたちの育成は重要であり、「日本一の子育て・子育て立県」の実現を目指します。また、女性や高齢者が生き生きと活躍するとともに、県民が連携・協力し、地域経営に参画する環境づくりを目指します。

最後に、四点目として「くらしづくり」ですが、今後、人口減少が一層進んでいくことが予想される中では、地域の活力を維持しつつ、いかに安全・安心な暮らしを確保していくのが重要です。豊かな自然環境や地域の絆を大切に、医療・福祉の充実、地域の安全など宮崎らしい「豊かさを実感できるくらし」の実現を目指すとともに、中山間地域対策として、「いきいき集落」「中山間盛り上げ隊」「鳥獣被害対策緊急プロジェクト」といった各種施策を展開していきます。

私は、この四つの視点で県政運営に取り組むことで、さらなる飛躍に向けた宮崎の再スタート「みやざき新生」を目指してまいります。

産業観光によるまちづくり



釧路の水揚げ見学ツアー

● 北海道釧路市 (p8-9)



盛岡手づくり村の外館

● 岩手県盛岡市 (p10-11)



川崎の工場夜景

● 神奈川県川崎市 (p12-13)



YKK ツアーズ専用バス

● 富山県黒部市 (p14-15)



モノづくりの現場を学ぶ子どもたち

● 長野県岡谷市 (p16-17)



花摘み体験をする観光客たち

● 静岡県浜松市 (p18-19)



産業観光施設を巡るルートバスで活躍するボランティア

● 愛知県名古屋市 (p20-21)



モニターツアーで実施したガラスビン工場の見学

● 岐阜県大垣市 (p22-23)



姫路城修理見学施設「天空の白鷺」の内部

● 兵庫県姫路市 (p24-25)



神田造船所を見学するツアー客

● 広島県呉地域 (p26-27)



風力発電をのぞむ生徒たち

● 福岡県北九州市 (p28-29)

「産業観光」をまちづくりの原動力に

— 新たな魅力を発信し、国内観光の活性化を —



東海旅客鉄道株式会社 相談役 ● 須田 寛

「産業観光」とは、歴史的文化的価値のある産業文化財（古い機械器具、工場遺構等）、生産現場（工場、工房、農漁場等）、産業製品等を観光対象（観光資源）として人的交流をはかる観光をいう。（第一・二・三次産業全てを対象とする）

右が「産業観光」の定義である。前提として「観光」についてもその概念を明らかにしておきたい。それは世上往々にして誤解されていることが多いからである。「観光」とは中国の古典「易経」にある言葉で、「地域のすぐれたもの（特色等）を心をこめて観、かつ学ぶこと、それらを心をこめてさらに誇りを持って観すること等によって人的交流をはかる行動」とされている。

人的交流は文化の創成発展につながるものであり、また人の移動は多くの経済効果をもたらすの

で「観光」とはとりもなおさず人間の文化的経済的行動といえる。したがって単なる遊びではないのである。近年「観光立国」の旗印のもと国が主導して観光の振興に取り組んでいるのもこのような原点に立った「観光」の意義と役割に着眼していることに他ならない。

一、「産業観光」の経緯

人間は古代から集落を形成して生活を営んできた。それは農漁業等で暮らしを立ててきたので、それらを集団で営むことが効果的だったからである。交通機関もなく小集落で生活していた古代の人々がまず関心を持ったのは、近隣の集落を訪れることであつた。すなわち他集落の人々の暮らしに触れて、そこでの異なった農漁業等の手法、生活様式を学び自分たちのそれと融合させ、暮らしの向上を図ろうとしたのである。

このような人間の本能に基づく近隣との交流が観光の原点といえよう。そしてその内容は他集落の農漁業という産業（ものづくり）に学ばいければ「産業観光」こそ「観光」の始源であつたと考えられる。「観光」という意識は持たないものの、このようないわば自然発生的な「産業観光」は太古からの長い経緯を持っていたと考えられる。

「観光」という意識に基づく組織的な行動としての「産業観光」は、近世に入って国際貿易等が盛んになってから本格化した。その動機のひとつは、十九世紀から始まった万国博覧会といわれる。第一回の一八五一年の水晶宮（英）、一八八九年のエッフェル塔（仏）等の展示物はいずれもその国の産業技術を世界に問うものであり、多くの観光客が訪れた（一九七〇年の大阪万博の理念は日本の産業技術の粋を世に問うものとされた）。

その後、国際貿易促進のために自国の工場等の公開、産業製品等を幅広く展示することが、テク

ニカルツーリズム（産業技術観光）の名のもとに国を挙げて進められた。

それは一九五〇年のフランスに端を発し、まず欧州各国で展開される。日本でも大阪で万国博があり、明治百年を迎えて近代化産業遺産の保存運動が国・学会・産業界等で盛り上がりつつあったこともあって産業遺産への関心が高まり、これらの保存活用策として「産業観光」が各地で勃興した。

そして二〇〇五年の愛知万国博を契機に、日本の生産中枢としての中京圏から本格的な「産業観光」の波が各地に波及していった。二〇〇七年、国の「観光基本計画」の中でもいわゆるニューツーリズムの一つとして位置づけられている。

二、「産業観光」の役割、必要性

今、なぜ「産業観光」なのか。観光立国が叫ばれているが、国内観光実績は依然低迷している。その原因は情報化時代を反映して観光客のニーズやその形態が大きく変わってきたこと。また国際的に見て観光市場は激しい競争下にあることである。このため日本の「観光」の国際競争力を強化しなければならない。そこで従来の「観光」から脱皮して新しい考え方に基づく「観光」のあり方を見つめ直し、国内観光の活性化を図る必要がある。「産業観光」はこのような要請にこたえるものとして、次の観点から注目されるに至った。

①観光資源を再発見する

「観光」をマンネリ化させないため、新しい観光資源の発掘が必要である。しかし、新資源開発は日本のように観光開発の進んだ国にあっては限

度がある。そこで従来からの観光資源の視点を変えて新しい魅力をそこに再発見し、資源を再構築することが考えられる。これまで観光資源は表1に示すように自然、歴史文化資源等性格別に分類されてきた。このような観光資源をテーマ（主題）別に、いわば従来の観光資源の分類をタテ割りとすれば、テーマ別に横串を入れ、ヨコ割りにして視点を変えてみることである。

すなわち「産業」（ものづくり）をテーマとしてもものづくりの視点から観光資源を再構成して表2のような資源群にまとめること、そしてものづくりにはそれぞれ歴史、経緯、地域特性があるのでそれによるストーリーを付して観光客に提示することが新しい観光の魅力を発信することにつながることになる。

②観光ニーズに対応する

近年、観光客のニーズは従来のいわば「見物型」の「観光」から、「体験観光」「学習観光」へ変わってきている。観光地では何かをやってみたい、「観光」から何かを学びたい、また学んだ上で観光してその印象を深めたい、という要望である。

「産業観光」は農漁業観光の多くが体験（釣り、汐干狩、地曳網、稲作、畑作等）を伴う。また陶磁器、木工、染織、製紙等を対象とする第二次産業観光、商業（ショッピング等）第三次産業観光もその体験を主な

内容としている。このようなニーズの変化に「産業観光」は的確に対応できる観光といえよう。

③国際観光に対応する

観光立国の大きい目標は、外国人観光客の誘致である（現在数百万人を十年後に二千万〜三千万人を目標としている）。日本を訪れる外国人観光客の中心を占めるのは、中国・韓国等の近隣諸国の人々である。それらの国々では近年、日本製品の急速な普及が進んでおり、観光客の中でその製品の製造過程を見学したりショッピングをした、とのニーズが急速に高まっている。表3にもあるように外国人観光客のこのような「観光」へのニーズに対応できる観光こそ、まさに「産業観光」なのである。

表1 観光資源の分類例

	有形観光資源	無形観光資源	総合観光資源
自然観光資源	・温泉 ・海（岸）、河川（湖沼）、山岳（高原） ・動植物（植物、動（生）物） ・天体（星）	・自然現象（不知火、蜃気楼、オーロラ） ・気象（雪、雨、四季） ・音	・自然公園（国立公園、国定公園、府県立自然公園） ・動物園、植物園、水族館（・風光）
歴史文化観光資源	・建造物 ・遺跡、史跡（遺跡・城郭（古墳）） ・美術工芸（陶磁器、絵画、彫刻（仏像）、古文書等） ・有形民俗文化財	・無形文化財（音楽、技術、民話、能楽、演劇） ・無形民俗文化財	・神社寺院（庭園） ・美術館、博物館（記念館） ・テーマパーク
複合観光資源			・都市、農村 ・リゾート
テーマ別観光資源 産業観光	・産業文化財（産業遺産）（機械器具、工場遺構） ・生産現場（工場、工房、鉱山） ・エネルギー（風車、水車、水道、ダム、発電所） ・交通通信（車両、船、港、通信設備、灯台） ・観光牧場、観光農場	・産業体験（農業、鉱業、漁業、工業） ・専門技術（わざ、熟練） ・ショッピング	・産業博物館、資料館 ・インダストリアルパーク（総合産業公園） ・産業観光地域（産業テーマパーク）

（注）1. 総合観光資源とは複数種の観光資源がまとまりひとつの観光資源となったものをいう。
2. 複合観光資源とは自然観光資源・歴史文化観光資源の両資源にわたる総合観光資源をいう。

表2 産業観光資源の種類（例示）

分野別	製造業 加工業等	鉱業	エネルギー 産業	交通・通信	農漁業	諸施設
歴史的 産業 文化財 (遺産) ※(明治初期 以前)	たたら、手織 機、からくり、 ろくろ、醸造 器具、のぼり、 窯、紡織器、 製紙具、漆器 具、各種工具、 器具等	旧鉱山 (金山、 炭田、 銅山等)	風車、水車、 発火具、 古水道、溜 池等	かご、人力車、 荷車、橋の ろし、半鐘 台、ろかい舟 船着場、古灯 台、運河	農具、漁具、 林業器具、 塩田、漁船 伝統的漁法、 耕作等	(産業) 博物館、 資料館等
近代化 産業 文化財 (遺産) ※(明治中期 -昭和)	自動織機、 工作機械、 醸造機器、 陶器工場、 製鉄所等 各種製造工 場、加工場等	炭鉱等 各種 鉱 山、 砕石場 製鉄所等	発電所、 浄水場、 ダム等	動力船、造船 所、灯台、 鉄道車両、鉄 道構造物(ト ンネル等)、自 動車、通信設 備、道路構 造物、港湾・荷 役設備、開門等 航空機	動力漁船、農 業機械、製鉄 所、林業器具、 漁業器具等	
生産現場 (工場、工房) (現在稼働中 のもの)	各種工場、事 業場、工房等	各種 鉱 山、 作業設備等	発電所、ダ ム、浄水場 ガス工場、 コジェネシ ステム等	鉄道現場 (駅、工場等) 造船所、空港、 港湾	農場(田畑)、 果樹園(養) 漁場、 森林	見学用モデル 工場・工房等
(体験)	ショッピング 工場、工房作 業の一部(製 糸、染機、製 紙、作陶)	砂金採取等	発火具 (火打石) 手動発電	乗車船体験等	農業体験 漁業体験 林業体験 ショッピング、 試食等	資料館、工場 等施設、産業 テーマパーク の体験コー ナー、売店等

(注) 1. ※に示す年代はその文化財(遺産)が主として使用開始された時期を示す。
2. 自然・歴史文化ないしは総合観光資源をテーマ別(産業)に再編成したもの。

このほか、観光形態が大型団体旅行中心から少人数グループ旅行への変化も進んでおり、人々の志向も多様化している。多様な観光資源が求められており、需要にキメ細かく対応するため、即ち観光資源の幅広い品揃えをするためにも「産業観光」への期待が大きい。

三、「産業観光」の特性

「産業観光」はその立地によって、また産業の

種類によって多様な展開が可能である。しかし、それらに共通する次のような特性が見られ、この特性を「観光」に活かすことが必要である。

① 地域と住民(生活)に密着した観光

産業は地域に根差して発展したものであり、住民生活に密着したもの(場合によってはその一部)といえる。従って「産業観光」に参加することにより、地域(住民)と観光客の間にコミュニケーションが高まり、真の人的交流が実現できる。

② 着地型の観光であること

観光の多くは発地からの情報によって進められてきた。すなわち観光客は発地(大都市圏等)に本社のある出版社の作成するガイドブックや旅行会社の情報をもとに観光することが多いが、これらは発地の目線に立つものとなりがちである。「産業観光」はその産業の所在する地域から発信された情報を中心とする(地域密着のものであるから)。このため着(観光)地にふさわしい、また着地と調和した観光として進めることが可能となる。

③ 三位一体の観光であること

「産業観光」は「見る」「学ぶ」「体験する」の三要素を持つ、いわば見学体験の三位一体の主體的観光であることは、前述の通りである。このため観光行動に幅と厚みを加えることができ、観光効果も大きくなり、その満足度も高められる。

④ まちづくりにつながる観光であること

産業はまちに根差し、まちと共に発展してきた。また、まちは産業あってこそその存在である。このため「産業観光」はまさに、まちそのものの「観光」につながる。「産業観光」の受け入れ体制整備は、すなわちまちづくりそのものである。観光資源の開発保全は観光地整備、すなわちまちづくりと一体として、都市計画の一環として進められるとき、その効果が高まる。

国の観光立国推進戦略会議の提言では「住んでよし、訪れてよしのまちづくり」を求めているが、「産業観光」こそまさに、このようなまちづくりによって成り立つものである。一方、「産業観光」の発展はまた、新しいまちづくりの原動力ともなる相互作用を持っている。窯業観光都市として多くの観光客が訪れる愛知県瀬戸市、常滑市や商業観光都市として発展する大分県豊後高田市等の例はこのような「産業観光」によるまちづくりに成功した好例といえよう。従って「産業観光」成功のためには行政(自治体)、住民、企業等の幅広い協力体制の構築と連携が必要である。

(注)「瀬戸市」：やきものの産地として名高い瀬戸市は万国博開催を期に「産業観光都市計画」を策定し、まちづくりに努めた。駅前に「瀬戸蔵」と名付けた市営の産業博物館を建設、これを中心にやきもののショッピング街、窯元等を結ぶ道路・駐車場等を整備し、駅周辺の景観を一変させた。

「豊後高田市」：「昭和のまちづくり」を目標に地元住民の総力をあげて「昭和」をテーマに商店街の再生を図り、三〇年代再現をコンセプトに家並み整備・修景を行った。

表3 訪日外国人の訪日動機ベスト10

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
全体	日本人の生活の見聞・体験 25.6	日本食 22.4	買い物 19.6	日本への憧れ(夢・好奇心) 14.5	自然・景観地 14.2	歴史・町並み・建造物 13.5	日本の近代・ハイテク 13.1	リラックス・温泉 12.6	伝統文化の見聞・体験 11.4	産業観光 5.8
韓国	日本人の生活の見聞・体験 24.1	日本への憧れ(夢・好奇心) 22.9	日本食 20.4	リラックス・温泉 20.1	買い物 15.0	歴史・町並み・建造物 12.2	日本の近代・ハイテク 11.6	伝統文化の見聞・体験 11.0	産業観光 8.7	自然・景観地 6.7
台湾	自然・景観地 33.5	買い物 32.6	リラックス・温泉 25.7	日本人の生活の見聞・体験 22.4	日本食 17.4	日本への憧れ(夢・好奇心) 13.9	日本の近代・ハイテク 13.8	伝統文化の見聞・体験 11.3	歴史・町並み・建造物 10.7	テーマパーク 5.8 (産業観光) 11位 5.6
中国	日本の近代・ハイテク 27.0	自然・景観地 16.2	日本人の生活の見聞・体験 15.7	買い物 11.7	日本への憧れ(夢・好奇心) 10.1	産業観光 9.9	リラックス・温泉 9.4	日本食 8.9	伝統文化の見聞・体験 8.5	歴史・町並み・建造物 8.5
香港	買い物 55.9	日本食 41.6	リラックス・温泉 28.6	日本人の生活の見聞・体験 21.0	自然・景観地 17.2	日本への憧れ(夢・好奇心) 13.0	日本の近代・ハイテク 10.1	伝統文化の見聞・体験 7.6	歴史・町並み・建造物 7.1	テーマパーク 7.1 (産業観光) 14位 2.1
米国	日本人の生活の見聞・体験 30.4	日本食 26.3	歴史・町並み・建造物 19.3	買い物 13.0	伝統文化の見聞・体験 12.3	日本への憧れ(夢・好奇心) 11.6	自然・景観地 10.8	日本の近代・ハイテク 8.8	博物館・美術館 4.6	リラックス・温泉 4.1 (産業観光) 12位 3.2

(注)「JNTO訪日外国人旅行者調査2003-2004」により社会経済生産性本部作成
「日本の近代・ハイテク」「産業観光」両項目を合わせたものが「産業観光」による訪日動機の割合を示す。

② 広域連携による展開

また欧米諸国では「産業観光」が盛んで大規模な産業博物館、まちぐるみの「産業観光」等も幅広く行われている。それらの提携を進めることも今後の国際交流促進の重要な着眼点といえよう。

① 国際的な展開
前述のように、外国人観光客の「産業観光」への志向は極めて強いと考えられる。今後、国際観光、特にインバウンド増加を期するためには外国人観光客向けのコース・メニューを幅広く用意する必要がある。特に外国人は国によって「産業観光」に対するニーズが異なっている(近隣諸国の人々は近代産業観光を、また欧米人は伝統産業観光に関心が深い)ので、国別にキメ細かくコース・メニューを用意する必要がある。

四 「産業観光」の今後

ニューツーリズムとして各地で定着しつつある「産業観光」は今後、次のような方向に重点を置き、さらなる発展を期する必要がある。

交通機関の整備・発達、余暇時間の増大もあって観光客の行動範囲が広がり、その期間も長期化しつつある。各地の産業は互いにつながりを持ち、またネットワークを構成しているものであるから「産業観光」も各地の観光資源同士が提携し(産業別にまたその時代区分別等)で展開することにより、その効果を高め、長期滞在型観光とすることを考える必要がある。また「産業観光」と他の在来型観光やいわゆるニューツーリズムと結びつけることにより、より幅広い地域密着型の総合観光圏形成まで発展させることが必要である。

③ 教育活動との連携

近年いわゆる修学旅行が従来の社寺・観光名所探訪旅行中心から脱皮して農作業体験等の体験型観光・分散学習への転換が見られるなど、その内容が変化しつつある。「産業観光」は学習観光・体験観光としての要素が強く教育旅行(修学旅行)にふさわしい内容を持つ。

しかも「産業観光」によって若者がものづくりの原点に立ち、ものづくりの心に接し、ものづくりへの関心が高まることにより、将来の産業後継者の育成につながることも期待される。

このような方向に「産業観光」を発展させることにより、「産業観光」によるまちづくりを通じて新しい「くにづくり」を目指すとともに、「産業観光」と教育との連携により人口減少下にあっても活気ある交流社会の実現を期することができるといっても過言ではない。

地域産業活かし滞在型メニュー開発 ―「観光」を第四の基幹産業に位置付け誘客―



釧路市 産業振興部観光振興室 主査

● 石田貴志

釧路市は、北海道東部の太平洋岸に位置し、釧路湿原、阿寒の二つの国立公園をはじめ、特別天然記念物のタンチョウや阿寒湖のマリモなど、世界的にも貴重で魅力のある地域資源が豊富に残された自然に恵まれたまちである。

国内有数の水揚げ量を誇る水産業や、大規模な製紙工場や食品・製薬工場のほか、国内唯一の坑内掘り炭鉱や重要港湾である釧路港を有するなど、東北道道の拠点都市として社会、経済、文化の中心的な機能を担っている。

かつては、水産・石炭・製紙業が当市における「三大基幹産業」といわれ、地域経済の発展を牽引してきたが、経済情勢等の変化によりこれらの産業は大きな影響を受けることとなった。

定着した「早朝魚河岸まち巡り」ツアー

この状況を受け、当市は「観光」を第四の基幹産業と位置付け、豊富な自然環境や食を武器として観光客誘致を進めてきた。

近年の旅行ニーズの多様化などにより、従来とは違ったメニュー、いわゆる「地域ならではの商品（オンリーワン商品）」の開発が必要となり、地域の産業を活かした観光メニューを軸とし、より経済波及効果が大きい滞在型メニュー造成の取り組みを進めることとなった。

平成十五年度から「リーディングモデル事業」として、十三年連続「水揚げ量日本一」を記録した水産業でメニュー開発を開始、漁業・市場関係者のご協力のもと、同年の九月から十月にサンマの水揚げ見学ツアーを行った。途中、地震により魚揚場が被災するなどアクシデントもあったが、秋鮭を中心としたツアーに再編して十九回のツアーを実施。参加者や関係者から貴重な意見をいただき、以後の活動に反映してきた。



「見学コースの炭鉱展示館」



「道新総合印刷釧路工場」

翌年からは、地元観光協会が主導となり、港周辺の散策と秋鮭の水揚げ・選別作業を見学する「早朝魚河岸まち巡り」としてツアーの受け入れを開始。現在まで四千七百人以上の参加があり、産業観光メニューとして定着している。

また団体型ではあるが、釧路フィッシャーマンズワーフの岸壁炉ばたで朝食をとるプランもはじめるなど、食・産業・滞在を意識したメニューとなっている。石炭業は平成十六年度から取り組みを開始。同年に市民体験会、平成十七・十九年度は修学旅行のプログラムとして、坑内見学を実施してきた。

この間の市町合併により、雄別炭鉱跡が釧路市の観光資源となり、稼動炭鉱と組み合わせ石炭業の今昔を見学できる体制が構築された。平成十九年には、雄別炭鉱跡地を含む遺産群が経済産業省から「近代化産業遺産」として認定を受けるとともに、旅行会社のOPTとして、雄別炭鉱跡、炭

鉱展示館などを巡るツアーが実施された。

その後も年二〜三回のペースでモニターツアーを実施。平成二十二年には釧路地域を周遊する旅行商品に石炭関連企業が組み込まれ、五回、九十三人が同社を見学するなど、一定の成果を得ることができた。

新聞紙の「生産から印刷まで」 見学コースも人気メニューに

製紙業大手の工場が操業している当市ならではのメニューづくりを目標に、港へ製紙工場へ印刷工場のルートで「新聞ができるまで」をストーリー化して見学できるよう、各企業の協力のもと平成十七年度より取り組みを始め、以後二年間、市民や関係者を対象にモニターツアーを行った。

平成十九年度には、北海道新聞社の工場新築を契機に、日本製紙と共同で「生産から印刷まで」を見学できることとなり、メニュー化が一気に加速した。このメニューについては、当市で発行している「修学旅行の手引き」にも記載をし、現在までに二万人ほどが利用している。

これら地域特性を活かした取り組みが評価され、平成十九年十月には、社団法人日本観光協会が主催する「第一回産業観光まちづくり大賞」の銀賞を受賞し、ビジネスモデルとしての可能性を高めることができた。

また平成二十年度から、釧路商工会議所を中心に釧路市、釧路観光協会、釧路観光連盟などで「くしろ圏広域観光推進コンソーシアム」を組織し、経済産業省の「広域・総合観光集客サービス支援事業」において「くしろ海底力（ソコヂカラ）プ

ロジェクト」として三カ年事業で進めていくこととなり、メニューの磨き上げを進めてきた。

観せるためではなく、 産業現場の体感が重要

これまで、企業・関係者の全面的な協力のもと取り組みを進めてきたが、産業観光のポイント観せるためではなく、生きた産業現場を体感してもらうことが重要であり、事業を進めていくうえで解決しなくてはならない課題も残されている。

一つは、受け入れ時の安全確保で、企業が産業活動を行っているため、人員を確保しにくく、これまで行政関係者や観光ガイドを配置して安全対策を講じてきたが、さらなる人員確保と配置する者のスキルアップが必要である。

二つめは、旅行商品としての受け入れ人数の問題で、旅行会社はワンバス（四十五人ほど）単位を希望する場合が多く、一部の企業しか対応することができない。

改修等も考えられるが、多大な費用負担が発生し現実的ではないことと、生きた産業現場を見学いただくという本来のコンセプトから外れてしまうので、他のメニューとの組み合わせや、分散して体験していただくな



「セリ直前の水揚げされたサンマ」



「国内唯一の石炭運搬専用列車」

どの提供方法を検討していきたい。

体験型やリアルさ求める旅行者

今後、体験型やリアルさを求める旅行者が増加してくると思われるが、どのようなメニューを提供するにしても、旅行者とガイド、旅行者と現場の作業員というように、人同士のふれ合いやつながりといったものが重要なカギを握ると感じている。

これは産業観光を進める我々も同様で、現場の作業員、観光ガイド、旅行関係者等と緊密な関係を築き、一体となって取り組むことが必要不可欠である。今日まで築き上げた関係をより深めるとともに、課題の解消と新規メニューの開発を行いながら、滞在型産業観光の確立へ向けて取り組みを進めていきたい。

見る・触れる・作るで地場産業振興 ―「盛岡手づくり村」開業以来25年間の歩み―



(財)盛岡地域地場産業振興センター
振興部長

佐々木雷蔵

岩手県盛岡市繋の御所湖畔に位置する盛岡手づくり村は、昭和六十一年五月に開業以来、今年で二十五周年を迎えた。

盛岡広域の地場産業を支援する、財団法人盛岡地域地場産業振興センターを中核となる施設として、国の伝統的工芸品に指定されている南部鉄器や岩谷堂箆笥の工房をはじめとする工芸工房と、盛岡冷麺や南部煎餅などの食品工房が十四軒立ち並ぶ工房群、そして馬産地岩手を象徴する移築民家の南部曲り家で構成され、見る・触れる・作るが一堂に行える施設「盛岡手づくり村」の狙いや歩みを紹介する。

盛岡手づくり村構想から実現へ

盛岡手づくり村の構想の始まりは、昭和四十年代に遡る。当時、盛岡市や盛岡商工会議所などに對して、盛岡で特産品を製造販売する事業所から特産品の販売促進を図るための施設建設や、老朽化していた南部鉄器協同組合の共同作業場で鉄瓶

や湯釜を製造する職人の新たな作業場の確保といった要望を受け、まずはいわゆる「工芸村」としての計画策定に着手したと聞いている。

著名な工業デザイナーの描いたその構想は「X村構想」と呼ばれ、後の自由な発想を妨げないような配慮をした名称であった。

昭和五十年代に入り、建設資金を国の高度化資金借入れという計画が実現に至ると、観光に関わるプランナーにより現在の施設の基となった「盛岡手づくり村構想」が構築され、全国に例のない複合施設として昭和六十一年に開業した。

年間百万人の入場者を集めた要因

近隣に有名な小岩井農場や、繋温泉が立地する盛岡市郊外、繋に建設した盛岡手づくり村の大きな狙いは多くの観光客を誘致し、地場産品の製造工程や実物を見て・触れて・作って理解し、お土産として買って貰おうというのが最大の狙い。

建設前には「年間二十万人から三十万人の集客

が見込めるだろう」という調査結果があったが、当時は好景気による国内旅行のブームや、本物志向という追い風もあり、開業初年度に七十八万人という予想を大幅に上回る入場者数であった。

その後も、中学生や高校生の修学旅行が、観光型から体験型への切り替えの時期にあたり、盛岡手づくり村の陶芸や工芸体験企画である「手づくり教室」を行う修学旅行団体の急激な増加もあり、平成元年から平成二年度には年間百万人の入場者を記録するに至った。

盛岡手づくり村がこれだけの入場者数を集めた要因は果たしてなんだったのか。いくつか挙げてみる。

① 立地の適正

小岩井農場まで十分。繋温泉郷まで五分。東北自動車道盛岡ICまで十五分と、盛岡市郊外のリゾート地の真ん中に位置しており、車での周遊には非常に便利であった。

② 本物が見られる・本物が体験できる

盛岡手づくり村の工房群は見せるためではなく、真摯にモノづくりをしている様子を来場者が垣間見る、というスタンスで運営されている。

そして、お客様が手づくり体験教室を申し出ると職人が作業の手を止めて指導にあたる、というリアリティが多くの観光客や旅行代理店の高評価を得ることになった。

③ 総合的な観光施設

工房で地場産業を見学し学べる。気に入った地場産品はその場で食べられる、製作体験もできる。地場産業振興センター館内は県内でも有数の品揃えを誇る「お土産館」で、地場産品のショッピング



馬産地岩手を象徴する南部曲り家

グが楽しめ、二階の「展示資料室」では地域の特徴ある地場産業の歴史や成り立ちが学べる。

南部曲り家では、古くからの馬産地であった特徴を表す馬と人間が共生する家屋と、その風情を肌で感じ取ることができる。

——以上のことから、来客の際は、「まず盛岡手づくり村を見てもらえば盛岡地域の紹介が一度に済む」と言われ、地元住民の支持も得られたことも入場者増大の大きな要因となったのである。

地域に様々な変化もたらす

盛岡手づくり村の開業は、イベント開催や地場



盛岡手づくり村の体験風景

産品の常設展示・販売を通じたPRなど、地場産業の振興の範囲にとどまらず、地域に様々な変化をもたらすことになる。

例を挙げると、盛岡の奥座敷と呼ばれるつなぎ温泉郷の日帰り入浴客の大幅な増加が盛岡手づくり村が開業してすぐに表れたという。

また、盛岡広域で見ると、手づくり体験を目的として訪れる修学旅行団体は小岩井農場の見学や盛岡市内の歴史ある街や店での自主研修の増加にもつながり、宿泊も近場であるつなぎ温泉や鶯宿温泉の利用が増えることになった。

こうした動きから、今では盛岡広域が修学旅行の目的地として定着するに至っている。

地場産業の観点では南部鉄器などの工芸品や盛

岡冷麺などの食品の製造工程を見せていることで地場産品の販売促進になることはもちろん、それを多くの児童・生徒が見学することで、「モノづくりの仕事に就きたい」という希望の芽が生まれることで、地場産業界の後継者につながることも期待されている。

大震災に負けず集客増に取り組む

ここまで、盛岡手づくり村の躍進や貢献度を書き記したが、現在はどうか。

バブルと呼ばれた時代の旅行ブームや高価な工芸品に注目が集まった「追い風」の時代は過ぎ去り、不景気による国内旅行の冷え込みにより来場者の減少は免れなかった。それでも、修学旅行などの教育旅行は堅調に推移しており、年間入場者数は五十万人前後を維持している。

この来場者を維持するために、こまめなイベント開催や観光ガイドの配置、また、地域の観光関連事業者同士の連携などを進めていた。

そうした最中。三月十一日の東日本大震災により、東北沿岸部は津波による今世紀最大とも言える被害を受けた。岩手県はもとより東北地域への観光客は途絶え、今までの課題以上に大きな問題を抱えることになったが、三・一一以降も盛岡手づくり村は停電の復旧とともに淡々と営業を再開した。

未だ、観光客で賑わうような解決策は見い出せないが、関係者一同、「まけるもんか！盛岡手づくり村」の気持ちで、懸命に集客増に取り組んでいる。

工場夜景がネットで一躍脚光 ―「かわさきの特性」活かし産業観光を推進―



川崎市経済労働局 産業振興部商業観光課
観光推進担当 担当係長

● 御簾納 誠

「非観光地」であった川崎

川崎市は、南部地域が京浜工業地帯の中核に位置し、戦前・戦後を通じて日本経済の牽引車として発展してきた全国有数の工業都市である。

一方、工業都市として急速に発展していく半面で、その負の遺産としての公害が、川崎市のイメージを固定化させていったのも事実である。

また、南北に細長く伸びる市域にもかかわらず、市域を縦に結ぶ鉄道や幹線道路が十分に整備されてこなかった半面、東京と横浜を東西に結ぶ鉄道や幹線道路が発達してきたことから、北部地域を中心に、東京と横浜という大都市に挟まれたベッドタウンとしての開発が進み、「観光地」というイメージにはほど遠いものとなっていた。

工業都市として発展してきた川崎市には、国際的にも知名度の高い企業・工場が多数集積しており、公害の克服に取り組みながら、先端的な工場や研究所群が形成されてきた。

また、首都圏の中に位置して交通の便が良いこともあり、折からの景気低迷による「安近短」というレジャー志向が高まる中で、ニューツーリズムとして注目を浴びていた「産業観光」を、有力な観光資源として活用していくことが必然的なものとなった。

川崎市は、平成十七年六月に「かわさき観光振興プラン」を策定し、戦略の一つとして、「『かわさきの特性』を活かした産業観光の推進」を掲げた。同年七月には、産業観光を推進することを目的に、川崎市、川崎市観光協会、川崎商工会議所を中心に、学識経験者、関係企業、観光事業者等で構成する「川崎産業観光振興協議会」が設立され、各種事業の企画立案やさまざまな事業を展開していくことになる。

旅行会社と連携し21年度から 「川崎産業観光ツアー」開始

産業観光を推進するためには、産業施設等の公開や工場見学など、企業側の理解と協力が不可欠

であることは言うまでもない。川崎の企業にとつて、これまで馴染みのなかった「観光」への取り組みは未知数であり、各種の違和感もあったと思われる。

しかし、そうした状況の中で、地域貢献という理解の下に各企業のご協力をいただきながら、川崎の産業観光の魅力を多くの市民の方々に知ってもらうために、平成二十年度から「川崎産業観光モニターツアー」を実施した。

産業観光施設の見学だけでなく、新しい観光スポットや昼食にもこだわったモニターツアーは、定員の約六倍の応募があるほどの人気を博し、平成二十一年度から民間旅行会社とタイアップした「川崎産業観光ツアー」へと発展を遂げ、毎年度十回程度実施している。

また、「工場萌え」という言葉に代表されるように工場景観を愛好する人々が増え、インターネット等を通じて話題となり、工場鑑賞家の間で「川崎の工場夜景が一級品である」と評価された



「川崎産業観光ツアー」での工場見学



全国工場夜景サミットでの「四大工場夜景エリア共同宣言」

ことから、川崎の工場夜景が一躍脚光を浴びることとなった。

◆ ◆ ◆ 定員の約17倍が応募した 「ドラマチック工場夜景ツアー」

平成二十年度の「川崎産業観光モニターツアー」の中で、ガイドに夜景評論家の丸々もとお氏を起用した「ドラマチック工場夜景ツアー」を実施したところ、定員の約十七倍の方々から応募があり、参加者に変えて好評をいただいた。

参加できなかった方を含め、多くの方々から「今度はいつ実施するのか」という問い合わせをいただき、平成二十二年度から民間旅行会社が主催する「川崎工場夜景バスツアー」の定期運行開始に

繋がった。しかし、定期運行を実現するためには、いくつかのハードルがあった。

バスツアーでしか入ることのできない鑑賞場所の開拓（プレミアムの創出）や、トイレの確保もそうだが、その中で一番の高いハードルは、工場夜景を解説できるガイドの養成であった。通常の観光ガイドと違い、工場夜景の魅力を的確に伝え、その場の雰囲気に合わせてガイドを行うといったスキルが求められるためである。

「川崎産業観光ツアー」では、平成十九年度から川崎商工会議所の主催で実施されている「川崎産業観光検定」の検定合格者（平成二十二年九月に「川崎の産業観光を支援する会」を設立）に対して各種研修を実施し、研修修了者には「川崎産業観光ガイド」として活躍いただいている。

「川崎工場夜景バスツアー」についても、市民活力を活かした地域での盛り上がりが見え、ここから、検定合格者に対して夜景専門講座や実地研修を実施し、「川崎工場夜景ナビゲーター」を養成することとした。

工場夜景バスツアーは川崎駅発着だけでなく、東京駅発着のツアーも定期運行され、韓国料理店が多数点在する川崎コリアタウンでの焼肉の夕食付きツアーとし、市外からの誘客が促進された。また、海上からも工場夜景を観たいという要望に応え、同年から「川崎工場夜景屋形船クルーズ」の定期運航も開始された。

◆ ◆ ◆ 広域連携による新たな展開

工場夜景に注目が集まる中、平成二十三年二月

には、工場夜景観光に取り組んでいる室蘭市・日南市・北九州市と共同して、全国初となる「全国工場夜景サミット」を川崎市で開催した。

この四エリアを「日本四大工場夜景」とし、工場夜景観光に取り組む全国の地域と連携して、工場夜景観光を一層推進していく「四大工場夜景エリア共同宣言」を行った。

このサミットがマスコミで大きく取り上げられ、全国的に大きな反響を呼んだ。

◆ ◆ ◆ 外国人観光客の誘致なども課題

このような中で、去る三月十一日に発生した東日本大震災に伴う計画停電等の影響により、産業観光ツアーや各種工場夜景ツアーを一時中止していたが、この五月から再開し、おおむね好調に推移している。

近年、工場見学をはじめとした産業観光は全国的に盛り上がりを見せ、工場見学のガイドブック等が何種類も発売されるほどの人気となっている。この人気を一過性のブームに終わらせないよう、受け入れ企業を増やし、工場夜景都市間のネットワークを活かした新たな仕掛けを展開するなど、魅力ある産業観光をつくっていくことが必要である。

さらに、飲食店やホテル等と連携したツアーの企画や、羽田空港の国際化を契機とした外国人観光客の誘致を近隣都市と連携して取り組むなど、地域経済に貢献する仕組みを構築し、地域を活性化させていくことも求められている。

広域連携で観光資源をネットワーク化 ―県や市の観光推進や地元活性化に貢献―

モノづくりへの理解深める狙いも

YKKグループは、世界約七十余カ国／地域でファスナーおよび建材製品の製造と販売をはじめとした事業活動を展開している。

その製造・技術の拠点である黒部事業所（所在地：富山県黒部市）において、二〇〇六年七月から産業観光としての工場見学ツアー「YKKツアーズ」の運行を開始し、二〇〇九年四月より事業所内の一部を「YKKセンターパーク」として一般に公開している。

黒部市、新川圏（富山県東部地域）ひいては富山県の活性化への貢献、そして一般消費者が見学を通じて当社の歴史や事業活動、モノづくりについて理解を深めていただき、「YKKブランドの認知度向上につながれば…」という願いに加え、富山県知事より富山県のモノづくりを活かした「産業観光の目玉」として、ぜひ黒部事業所を広く一般に開放してほしいとの要請もあり、産業観

YKK株式会社黒部事業所
総務・広報グループ長

● 小林聖子

光に取り組むことになった。

無料の工場見学

「YKKツアーズ」開始

二〇〇六年七月二十一日より、産業観光・工場見学ツアー「YKKツアーズ」を始めた。

当時は、事前予約制とし、定員四十人で午前・午後の一日二回運行した。「YKKツアーズ」を始めるにあたり、ご来館いただいたお客様に安全にご観覧いただき、また、YKKをより身近なものと感じていただけるように展示施設の整備はもとより、セキュリティ面も整備した。

ツアーは、JR黒部駅前にあるホテルに集合したのち、専用バスで黒部川の豊かな水が地下水となり、湧き水となつて地表にあらわれる清水や富山湾一円と能登半島まで一望できる生地海岸を見学しながら黒部事業所に向かい、展示ホールや製造ラインを見学したあと、帰りは

魚の駅「生地」を経由してホテルへもどる行程をとり、地域観光とYKKの工場見学を組み合わせ、無料で運行した。

産業観光の運営は、黒部ツーリズム株式会社（YKKの一〇〇％子会社）に委託している。

「YKKセンターパーク」の一般公開

当初は「YKKツアーズ」として、地域観光とYKKの工場見学を組み合わせたバックツアーとして運行をスタートしたが、黒部事業所50ビル（当社の創業五十年を記念して建設された管理棟）周辺のセキュリティを整備し、二〇〇九年四月十八日から土日も含めて、午前九時～午後四時までの間、YKKセンターパーク内の施設（50ビル展示ホール、丸屋根展示館、ふるさとの森）を一般に公開している。

開園時間内であれば、予約なしでどなたでもお越しいただくことができ、無料で自由に施設を見

2011『黒部川扇状地の街』
モノづくり企業とトロッコ電車見学会

参加者募集

見学コース

黒部市内の3つの企業が合同で実施する「最先端技術や歴史、文化的施設をめぐる産業施設見学会」です。

<集合>
9時20分

<解散>
YKKセンターパーク
(14:20頃)

YKKセンターパーク
モノづくりを紹介する
展示施設と工場見学
(9:30～11:00)

うなぎ友学館
黒部市の歴史、民謡
自然などを学ぶ
(11:30～12:45)

黒部峡谷鉄道
運転室に乗って記念撮影
機関車検修庫を見学
(13:00～13:30)

宇奈月ダム
宇奈月発電所と
ダムを見学
(14:40～15:55)

やまびこ遊歩道
以前トロッコ電車が通っていた「山形線」トンネル
「発電設備等環境の歩道」を体験ウォーク
(14:05～14:35)

黒部川電気記念館
黒部川電源開発の歴史を
学ぶ
(13:45～14:05)

実施日

第1回 平成23年 5月20日(金)	第5回 平成23年 8月26日(金)
第2回 平成23年 6月 3日(金)	第6回 平成23年 9月16日(金)
第3回 平成23年 7月29日(金)	第7回 平成23年10月14日(金)
第4回 平成23年 8月 5日(金)	第8回 平成23年10月28日(金)

集合

時間:9時20分 場所:YKKセンターパーク(黒部市吉田200) 詳細は裏面

募集人数

各回30名(先着順) 参加費 無料(昼食代は各自ご負担下さい)

対象者

小学生以上で階段の昇降等に支障のない方(小学生は保護者同伴でご参加願います)

お申込み方法

〔平成23年4月18日(月) 受付開始〕

ファックスの場合は
参加希望者の氏名、氏名、年齢
代表者の電話番号
・氏名希望日
を記入願います

電話またはファックスにて下記までお申込み下さい。

株式会社YKKツアーズ黒部支店
電話 (0765)54-8686 FAX (0765)56-8069
(受付時間:9:00～17:45 土日祝日休業)



YKK センターパーク全景



黒部川扇状地

学できるように、オペレーションを変更した。施設の自由見学だけでなく、以前同様にセンターパーク内の施設見学と専用バスでの工場見学を組み合わせたパッキングツアー「YKKツアーズ」も無料で運行している。

地域と連携したオペレーション

YKKグループでは、「YKKセンターパーク」の一般公開に合わせて、より多くの方々に黒部市にお越しいただけるよう、行政や他の観光地、他の企業との連携を図り、観光資源のネットワーク化にも取り組んでいる。

◆黒部市観光シャトルバス

「YKKセンターパーク」の一般公開をきっかけに黒部市は、二〇〇九年四月から十月まで市内の公共交通機関二駅と観光施設（YKKセンター

パーク、魚の駅「生地」を周遊する黒部市産業観光シャトルバスの運行の実証実験を行った。

富山県外からのアクセス駅であるJR黒部駅と宇奈月温泉へのアクセス駅である電鉄黒部駅をバスで周遊することにより、観光客の利便と滞在促進を図った。

◆にいかわ産業観光モニターツアー

富山県東部の三市（滑川市、魚津市、黒部市）、二町（入善町、朝日町）で構成する富山湾・黒部峡谷・越中にかわ観光協会が主催する「にいかわ産業観光モニターツアー」が二〇〇九年から二〇一〇年まで七回実施され、延べ百八十七人が参加した。広域連携を行うことで、二泊三日以上の滞在型観光に対応できるよう取り組んでいる。

◆黒部川扇状地の街 モノづくり企業とトロッコ見学会

黒部川流域で事業を展開する関西電力、黒部峡谷鉄道とYKKが協力し、YKKセンターパークを始点に、うなぎ友学館、宇奈月麦酒館、トロッコ電車の機関車検修庫、黒部川電気記念館、宇奈月発電所と、それぞれの施設を一日かけて回る見学会を実施している。

これまでは、各社が独自に見学会や施設を公開していたが、黒部川の下流から上流、黒

部峡谷の入り口へとダイナミックな自然景観を楽しむ、流域でのモノづくりや電源開発の歴史などを学ぶ新しい産業観光コースをつくることで、市や県の観光振興の一助になればとの思いで、三社の連携により、二〇一〇年度は五月から十二月にかけて毎月一回、合計八回の合同見学会を実施した。

参加費が無料で、普段見学できない施設を見学できるということもあり、募集定員三十人名に対し、各回ほぼ満員で運行した。二〇一一年度も同様に実施している。

北陸新幹線開業に向け 新たな観光戦略も展開

二〇一四年度には北陸新幹線が開業し、黒部市内に新黒部駅（仮称）が設置される。黒部市は、標高三千級の北アルプスを背景に、天然の生簀である富山湾に面しており、山の魅力と海の魅力を同時に満喫できるまちである。北陸新幹線の開業に向け、これらの観光資源をいかした新たな観光戦略の展開が期待されている。

その一環として、二〇一一年四月に黒部・宇奈月温泉観光協会が発展的に解消し、社団法人黒部・宇奈月温泉観光局が誕生した。観光局が独自に国内旅行を企画、販売できるよう第二種旅行業の登録を取得した。

YKKグループとしても、点在する資源を点から線へ結びつけ、ネットワーク化し、魅力あるまちづくりや、地域全体の活性化につなげられるよう、今後も富山県および黒部市の観光振興の推進に寄与して参りたい。

「産業」を観光資源の主役に

—ものづくり体験は旅育にも効果—

編集部

ついでに。

会社産業と観光の接点を模索

「隣の諏訪市のように温泉旅館が多いわけでもないし、諏訪大社のような観光名所があるわけでもない」。岡谷市経済部商業観光課の今井康貴氏がこう語るように、同市は、長野県内にありながら観光政策への着手が遅かった。

しかし、経済産業省が助成金を出す「地域資源∞全国展開プロジェクト」に「岡谷産業観光推進事業」が選ばれたのを機に、平成二十年からものづくりのコンテンツ化を模索し始めた。

商業観光課と観光協会が観光への道筋を立て、岡谷商工会議所が助成金の申請や地元企業への働きかけを図るなどして、官民の両輪がうまく始動。今年二月にはJTB法人東京がテクニカルツーリズムツアーを首都圏で募集する一方、この夏から秋にかけて、地元の旅行会社が産業観光と体験を組み合わせた着地型ツアーを自ら実施するなど、産業と観光が実を結び始めた。

平成二十四年秋には日本観光振興協会が主催する「全国産業観光フォーラム」が岡谷市で開催されることも内定しており、今、産業観光に弾みが

長野県のほぼ中央、諏訪湖畔に位置する岡谷市は人口約五万三千人の街。製造業の割合は県内の他の市と比べると突出して高く、製造業は全事業所数の二四・四％（長野県「平成十八年事業所・企業統計調査」）を占める。

一方、観光業の比重は低く、国が進める観光立国や、地域の特性を活かした観光の魅力づくりを推進する県の観光立県長野再興計画（平成二十（二十四年）を考慮すると、市は自ずと産業観光に力を入れなければならなかった。

しかし、明治から昭和初期にかけての製糸工業に端を発し、戦後のカメラ、オルゴール、腕時計の部品加工を経て、今では精密工業から超微細加工へと変化を遂げる市の工業技術系は、六百二十九社中七一・五％が九人以下の会社である。

「中には家族で経営している小規模な会社もあ

り、百人を超える会社は片手にも満たない」（岡谷市経済部産業振興戦略室）のが現状だ。

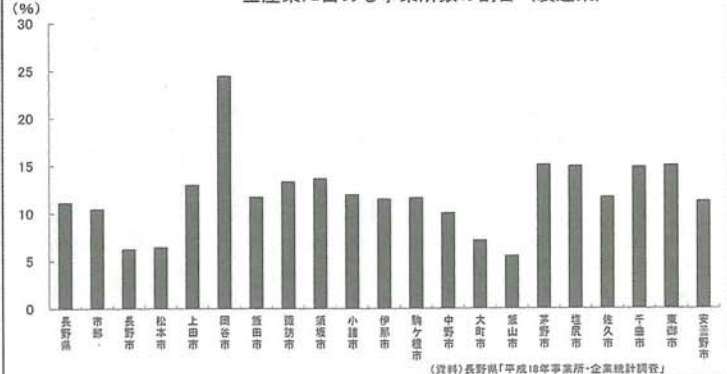
こうした環境下で、いかに産業を観光と結びつけるか。市は平成二十年、助成金を元に岡谷の観光イメージを調査したり、産業観光のターゲットを模索した。イルフ童画館やスケートなど、関係者が良いと思っていた多くのコンテンツに認知・関心が低いことが判明する一方、産業観光については受け入れ企業のメリットが見出せず、大きな壁が立ちちはだかった。

「仕事中に観光客に來られても対応できず、報酬がないのに専任を置くわけにもいかない。ましてや大手自動車メーカーのように見学ラインができてはいるわ

けではないので、現場を見学されると危ない、という意見が一部の会社から出た」（今井氏）という。

そこで、岡谷商工会議所がリクルートに産業観光のモニター調査を依頼。当

全産業に占める事業所数の割合（製造業）



（資料）長野県「平成十八年事業所・企業統計調査」



マルヤス機械が模型コンベヤーを開発

ある。メリットをあえて挙げるなら、就職採用に向けての宣伝程度だが、これは取ってつけたよう

時は「産業観光では集客できない」と言われ、ミニコンベヤー作りにフィギュアスケートやログコテージでの宿泊を絡めた「一泊三食&おみやげ産業観光体験モニタープラン」を造成し、じやらの関東版で発売したところ、六組の家族を集客した。この時のアンケート結果から得られた課題を元に、平成二十二年には「味噌作り」や「花摘み体験」を採り入れるなど、観光客にとって身近な体験を織り交ぜ、緩急をつけたツアーを造成している。

見学だけでなく、作って分らせる工夫づくり

平成二十二年に初めて助成金の交付を受けてから四年。助成額は年々減っているが、この間、観光客を受け入れる企業の姿勢も変わってきた。

受け入れ企業に共通しているのは、自社の利益ではなく、地域の活性化と訪問してくれた観光客が喜ぶことで、自分たちもやりがいが見出せる社会貢献である。メリットをあえて挙げるなら、就職採用に向けての宣伝程度だが、これは取ってつけたよう

なもので、商工会議所の各社への説得が功を奏している。

オリンピックが出資するラプラントは、土壌汚染の心配がない完全無農薬を実現した水耕栽培として有名で、岡谷でも有数の見学地となっているが、こうした販路の開拓につながるようなケースは稀。大半の会社は収益がないにもかかわらず、地域のため時間を割いて奮闘している。

岡谷を本社に全国展開するローラコンベヤー、ベルトコンベヤーのメーカー、マルヤス機械は、製造現場を長時間見せるのは危険が伴うことから、三十分程度の見学とし、コンベヤーの仕組みがわかる模型製作キットを開発。観光客は小さなコンベヤーを自分で組み立てながら、金属と非金属を分別するコンベヤーの仕組みを学習できる人気コンテンツを開発した。

「模型コンベヤーは作った後も自宅で楽しめる」とあって人気。開発は画期的だった。模型も説明用のペーパーも社員が作った。子供だけでなく、科学の時間の延長として大人にも楽しんでもらえる（小口忠元・取締役総務部長）。

ひらめく人材育成に産業観光を

一方、「日本はモノづくり社会であるはずなのに、教えてもらわないと何もできず、センスがなくなっている。チャレンジ精神もない。すべてを与えられ、ひらめきがなくなっている」と警告を鳴らすのは、ソーデナガノの丸山忠製造部長だ。

精密プレス加工業の同社はかつて、チタンの色付けなどを行っていたが、もっと身近な素材で変

わったことができないかと思いつき、平成二十一年八月、アルミニウムを加工するラボを開設。来場者は自分たちでアルミニウムに色を付けるアルマイト処理を行う。

「なぜ、携帯、カメラ、鍋などに色を付けなければならぬのか。理屈を学んでほしい」と、丸山部長は職人らしく目を輝かせる。

アルマイト処理の理屈など大人だってわからないのだが、製品ができるまでの行程を自分の体験を通して理解できると、全員が興味を示すと言います。産業観光が旅育としても役立っている。

同社の関連会社のニオムネット旅行事業部は、工房でのアルマイト加工と稲刈り体験などを組み合わせた着地型観光を開発し、この夏から秋にかけて催行する予定だ。

地元の旅行会社を育成したいのは、市や商工会議所の意向であり、同社は自社のメルマガや商工会議所、市の東京事務所などを通じて集客する予定だが、集客力のある大手旅行会社に頼らず、どこまで結果を出せるか。岡谷市は今、産業観光が発展するた



ソーデナガノではアルマイト処理を体験できる

グローバル企業とも連携した産業観光 体験旅行を組み込みインバンド事業の促進へ



財団法人 浜松観光コンベンションビューロー
事務局長

● 石川 淳

ものづくりのまち浜松

東京と大阪の中央に位置する浜松市は、その地理的条件、一年を通して温暖な気候、さらに太平洋、天竜川、浜名湖そして南アルプスに代表される豊かな自然に恵まれ、古くから「ものづくり」が盛んな町として発展してきた。

なかでも、繊維、楽器、輸送用機器といった三大産業を軸に発展を遂げ、近年では、光技術、電子技術関連の先端技術産業も急速に発展し、ホンダ、ヤマハ、スズキ、カワイ、浜松ホトニクスなどの世界的なリーディングカンパニーを輩出している。

この地域の産業のルーツは、江戸時代の織物業や製材・木工加工業が浜松の基盤を作り上げ、その後、「織物から自動織機」「製材から木工機械へ」など、産業が進化し、豊田佐吉（トヨタ）、本田宗一郎（オートバイ）、山葉寅楠（オルガン）に代表される発明家や起業家が相次いで誕生するな

ど、浜松発の新しい産業が生まれていったのである。

産業観光の推進に向けた取り組み

産業観光とは、歴史・文化にすぐれた産業施設を巡って、様々な発見や体験をする新しい観光のスタイルである。

浜松地域には、ホンダ、ヤマハ、スズキ、カワイ、浜松ホトニクスなどの世界的な企業が集中し、これらの関連企業も多く集積していることから、産業観光を推進させる官民組織として二〇〇一年「浜松市産業観光研究会」を立ち上げ、産業観光の推進に向けた協議・検討を実施している。また、産業観光施設間のネットワーク化のための連絡会やモデルコースの作成を行ってきた。

翌二〇〇二年には、「第二回全国産業観光フォーラム（日本観光振興協会主催）」を開催し、企業、市民等へ、新たな観光としての「産業観光」をアピールした。その後も、研究会を中心に、産業観

光の推進に向け、新たな施設の開拓や受入施設との調整などを進めてきた。

さらに、東アジア地域をターゲットとしたインバンド事業においても地域を代表する観光資源として「産業観光」をアピールしている。こうした、地道な（？）事業展開の甲斐があつてか、二〇〇八年には、第二回「産業観光まちづくり大賞（金賞）」（日本観光振興協会、全国産業観光推進協議会主催）を受賞した。

代表的な産業観光施設

次に当地域の代表的な産業観光施設をご紹介します。

（一）うなぎパイファクトリー



うなぎパイファクトリー



浜松市楽器博物館



航空自衛隊広報館（エアーク）



スズキ歴史観

地域内の産業観光施設とは、「浜松市産業観光研究会」を中心に連絡会とのネットワーク化をより深め、ものづくりのまち浜松の伝承を進め、産業観光を推進していきたいと考えている。

地域内の産業観光施設とは、「浜松市産業観光研究会」を中心に連絡会とのネットワーク化をより深め、ものづくりのまち浜松の伝承を進め、産業観光を推進していきたいと考えている。

二〇〇五年オープン。浜松を代表する銘菓「うなぎパイ」の製造工程を公開。ガイド付きの見学ツアーもある。限定フルーツを楽しめるカフェサロンやお土産コーナーも充実している。

〈見学時間／三〇分、開館時間／十時～十六時三〇分、休日／不定休、入館無料〉

(二) 浜松市楽器博物館

一九九五年にオープンした日本で初めての公立楽器博物館。世界の楽器約千三百点を展示。楽器の音色を聴けたり、演奏体験もできる。

見学時間六十分、開館時間九時三十分～十七時、休日／第二・四水曜日、年末年始ほか、入館有料

(三) 航空自衛隊浜松広報館（エアーク）

一九九九年にオープンした国内で唯一、本物の戦闘機のコックピットに座れる航空機を展示。離着

陸などの操縦を体験できるフライトシミュレーター、さらにフライトスーツの試着などができるテーマパークである。

〈見学時間／六十分、開館時間／九時～十六時、休日／月曜日、最終火曜日、年末年始ほか、入館無料〉

(四) スズキ歴史館

二〇〇九年オープン。織機から二輪、四輪へと転身を遂げたスズキの歴史や車の開発から生産工程を立体映像で紹介するとともに現在の製品を展示している。

〈見学時間／六十分、開館時間／九時～十六時三十分、休日／月曜日、年末年始ほか、入館無料〉

このほかにも、ヤマハ(株)掛川工場ハーモニープラザ、(株)河合楽器製作所竜洋工場、浜松市西部

清掃工場をはじめとする各種産業観光施設がある。詳しくは、<http://www.hamamatsu-daisuki.net>をご覧ください。

今後の取り組み

本地域においては、近年、世界的な企業の生産拠点の見直しなどによる製品生産工場の転出が進み、市内において、一般観光客向けとして「部品から製品まで」の製造過程等が見学できる産業観光施設の減少が生じている。

このため、他の観光資源との連携による商品開発として、例えば、「産業観光」＋「体験観光」といったモデルの開発などが求められている。このほか、インバウンド事業の推進を図るた

産業観光バスが誘客・送客に威力 ―産官連携によるビジネスモデルを構築―



(公財)名古屋観光コンベンションビューロー
事業部 部長

● 小宅 一夫

◆ ◆ ◆
全国に先駆け産業観光を推進

中部圏、名古屋大都市圏の中核都市である名古屋は、二〇〇五年の「愛・地球博」、中部国際空港の開港を契機に、名古屋駅周辺に多くの超高層ビルが建設され、都市の景観が大きく変貌した。また、愛知県の製造品出荷額が連続三十四年間全国一で、当地域は全国有数の産業集積地であることから、この地域資源を生かした観光として産業観光に早くから着目し、全国に先駆けてこれを推進している。

名古屋市内も、名古屋商工会議所が中心になって、平成八年に自治体、観光団体、産業観光施設等が定期的に情報交換する場として設立された産業観光推進懇談会（AMIC）に参加するとともに、名古屋観光コンベンションビューローを中心に、産業観光のパンフレットやリーフレットを作成し、観光キャンペーンなどを通して、産業観光を積極的に推進している。

◆ ◆ ◆
産業観光施設をつなぐ
ルートバス「メーグル」を運行

名古屋市内には、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館、ノリタケの森を始めとする大型の産業観光施設があるが、それらの施設は工場跡地等を活用していることから、地下鉄のアクセスが良好でなく、個人の観光客にとって観光の対象になり難かった。

この点に在している産業観光施設、観光施設をつなぐ観光ルートバスの運行が期待されていたが、愛知万博の開催期間中に名古屋市交通局が循環バスとして車体をラッピングして運行し、万博で来名された観光客に好評を得た。

万博終了後もルートバスの運行を継続するよう多くの関係者の要望があり、これに呼応して平成十九年七月から名古屋市の観光行政の一環として、観光ルートバス「メーグル」の運行が始まった。

名古屋城の金鯱にちなんだゴールドカラーのバ



産業観光バス情報交換会の会議風景

スの車内には、観光パンフレットが配架され、モニターテレビで沿線の観光施設が映像で紹介されるほか、土日には観光案内を行うボランティアが乗車し、遠方の観光客に大変好評を博している。

◆ ◆ ◆
多くの意見・要望受け
「産業観光バス」誕生

「産業観光の裾野を広げるため、定期観光遊覧バスの『産業観光コース版』も産業観光を推進する上で必要」との意見や要望が多くあったが、現実的にはバス会社、旅行会社が単独で実施するのは困難であった。

紆余曲折を経て、ビューローと民間事業者の連携によるビジネスモデルの構築により、産業観光バスは、平成十八年十月より、ビューローの企画協力の下、旅行会社二社が毎週火曜日と水曜日に

(2) 事業の特徴
民間事業者が独立採算で実施しており、名古屋市やビュローからは補助金の支援はなく、産官が役割を分担しながら連携を図っている。
ビュローの役割として、新しい産業観光施設

アーコースの企画協力や産業観光バスのPRなどのソフト面での支援を行っている。
ビュローの企画協力の条件としては以下の通りである。

- ① 毎月四回以上、同じ曜日に実施する
- ② 名称を「産業観光バス」として専用のチラシを作成する
- ③ 原則として中部九県内の産業観光施設を一カ所以上コースに組み入れる
- ④ 二カ月に一回以上は名古屋市内の産業観光施設をコースに組み入れる
- ⑤ 最低二年間は事業を継続する。

図1 産業観光バスの概要

	火曜日コース	水曜日コース
実施者	名鉄観光サービス(株)	名阪近鉄旅行(株)
参加料金	6,000円	6,000円
出発地(乗車地)	名古屋駅、名古屋テレビ塔	オアシス21、名古屋駅
ツアー形態	日帰り・昼食付き、ガイド添乗	
コース	2カ月単位で設定 (産業観光の専用チラシ作成)	

実施している。

(1) 事業の概要

産業観光バスは、コンベンションビュローの企画協力の下、実施事業者である旅行会社がチラシの作成、募集、集金等を行い、実施事業者の責任で産業観光バスの運営を行うものである。コンベンションビュローは各ツ

を発掘するとともに、他県の観光団体とのネットワークを活用し、産業観光バスの訪問先の施設でツアー客の受け入れ協力やボランティアの派遣協力などを依頼し、ツアーの付加価値を高めている。
なお、ビュローが取り組んでいる産業観光バスは「産官連携による産業観光バスのビジネスモデル構築」として、(社)日本観光協会・全国産業観光推進協議会が実施した「第一回産業観光まちづくり大賞」の金賞を平成十九年十月に受賞し、東京の新聞社、テレビ局からの取材も増加して、広くPRが行われている。

域内の相互交流深め 産業観光をさらに推進

産業観光バスの実績として、平成十八年十月から平成二十三年

五月までの四年七カ月で五千八百七十九人の参加があり、毎年、安定的に参加者を確保している。

この産業観光バスは、中部広域観光推進協議会の九県のエリアを対象にツアーを実施しているが、そのエリア内の観光団



産業観光バスの観客が有松しぼりを見学



第1回産業観光まちづくり大賞の表彰式

体の協力を得て、毎年、バス事業者と中部圏内の観光団体との情報交換会を開催している。

平成二十二年度は、富山県、滋賀県が加わり、中部七県の観光団体と県の観光担当者が参加して受け入れを含めた連携について意見交換した。今後も協議会エリア内の多くの観光団体と連携して、双方に観光客を送客・誘客しながら、域内の相互交流を活発にすることで、産業観光の発展を図っていく。

名古屋市では、「産業観光バス」や「メーグル」をベースに、新しい産業観光施設を開拓するとともに、新しい顧客を創造し、将来的に県外や海外から名古屋に向けた産業観光の旅行者を着実に増加させるため、様々な施策を組合せながら産業観光を積極的に推進していく。

西美濃の「ものづくり力」を発信 — 地域特性を活かし、交流産業創出に注力 —



大垣商工会議所 交流産業委員会 委員長

堀 富士夫

岐阜県大垣市の概要

大垣市は、日本列島のほぼ中央、岐阜県の南西部に位置し、中山道や美濃路が通るなど古くから東西の経済・文化の交流点として栄えてきた地域である。

国内有数の地下水の自噴帯に位置しており、良質で豊富な地下水に恵まれていることから「水の都」とも呼ばれ、現在でも市内各地に自噴井戸があり、そのうちの一つ加賀野八幡神社井戸は、環境省の平成の名水百選にも選ばれている。また、大垣は俳聖・松尾芭蕉が生涯に四度も訪れた地で、俳諧紀行「奥の細道」の終着地でもある。

現在、市域には日本の主要交通網の東海道本線、東海道新幹線、名神高速道路などが通り、主要都市圏へのアクセスが便利である。名古屋へ鉄道で約三十分、中部国際空港へ車で約一時間三十分、新幹線経由で東京へ約二時間三十分、大阪へ約一時間三十分でアクセスできる。

人口は、岐阜県第二位の約十六万四千人（平成二十三年六月三十日現在）。平成二十年には市制九十周年を迎えたところである。

大垣商工会議所の交流産業創出に向けた取り組み

大垣商工会議所では、平成十六年十一月に新たな地域づくりのために「参加と連携」をうたい、「交流産業」がこれからの地域づくりのキーワードとして重要視されることから、地域の活性化を願い、交流産業委員会を設け積極的に事業展開を実施している。

平成十七、十八年度の二カ年にわたり、交流産業委員会では、岐阜県大垣市を中心とする西美濃地域への交流人口拡大を図るため、今後の交流産業のあり方を研究し、「西美濃地域広域交流産業戦略の提言」を策定した。

平成十九年度には、観光関連業者、ものづくり事業所等の会員企業、他、県・市等の行政機関、岐阜経済大学、近隣商工会、観光ボランティアガ

イド団体等、産官学民が一体となった「交流産業戦略推進会議」を組織し、以降、地域資源∞全国展開プロジェクト（平成十九・二十一年度）、岐阜県地域活性化ファンド（平成二十・二十二年度）などを活用し、提言の具現化を図るため、住んでよし訪れてよしのまちづくりを目指して諸事業に取り組んでいる。

西美濃地域広域交流産業戦略の提言

1. 地域の歴史や文化など資源を磨いて交流産業に活用
2. ものづくりの産業力を活かし産業観光の展開
3. 西美濃の交流産業によるネットワーク化
4. 地域の自然環境を活用した健康・健脳産業の創出・育成
5. 産官学民の連携強化で交流産業を創出・支援
6. ホスピタリティにより顧客満足を高め交流人口を増大
7. 交流産業振興のフォローアップ

産業観光をテーマに西美濃の「ものづくり力」を発信

西美濃地域は、古くから「ものづくり」が盛んであり、自動車用バルブコア生産量日本一、パソコン・携帯電話などのプリント基板生産量日本一、車椅子生産量日本一などに代表される全国に誇れるものづくり企業や産業が数多く集積し、産業遺産や文化財も多数存在している。

西美濃地域の産業観光資源を活用し、当地域の「ものづくり力」の広域的なPRと交流人口の拡



大垣市の特産「木枅」工場の見学



国内シェア日本一の氷砂糖工場での見学

大を図るため、平成二十年度、二十一年度の二年間にわたり、産業観光をテーマとする事業に取り組んだ。

産業遺産・文化財、工場見学受入施設を調査

① 見学受入施設、産業遺産・産業文化財の調査

会員事業所へのアンケート及び西美濃広域観光推進協議会所属の十市町の協力を通じ、事業所見学の可否、産業遺産・文化財の有無等について調査した。

○ 調査件数：四千百十件

○ 見学受入施設件数：六十件

○ 産業遺産・文化財件数：十五件

② 展示会・キャンペーン事業

大垣市観光協会等と連携し、東京都、大阪府、愛知県で展示会・キャンペーンを実施した。

③ モデルコースの設定とモニターツアーの開催

西美濃地域の産業観光ツアーのモデルコースを「くらし」「高技術・IT」「食と自然」の三つにわけて設定し、それぞれモニターツアーを開催した。

④ マスメディアを活用した広域的な広報活動

地元唯一のFMラジオ局である、岐阜エフエム放送㈱のネットワークを活用し、ラジオ・新聞等により、当地域の「ものづくり力」を全国に向けて情報発信した。

⑤ 西美濃産業観光読本（パンフレット）の作成

見学受入施設の紹介、アクセスマップ、西美濃の産業の歴史及び日本一企業等を紹介したパンフ

レットを作成した。

⑥ 西美濃地域産業観光ガイド（ホームページ）の作成

西美濃産業観光読本の掲載内容に加え、西美濃の代表的なスポットや企業の今昔を対比するコーナーや、工場見学風景の動画を盛り込んだホームページを開設した。

<http://www.ginnet.or.jp/ogakicci/sankan/>

今後は「おもてなし」のあり方を研究

西美濃地域は、ものづくりが盛んで、産業遺産・文化財、工場見学受入施設などの産業観光資源に恵まれているとともに、本文の冒頭で紹介したとおり、松尾芭蕉の奥の細道むすびの地や、豊富な自噴水など観光資源にも恵まれている。

特に、奥の細道むすびの地については、平成二十四年四月に記念館のオープンを控えており、今後一層の誘客が期待されている。

また、大垣市観光協会がJRとタイアップし、今年の春に実施したイベント「水の都おおがき川下り」には県外から多くの利用者があり好評であった。

今後は、産業遺産・文化財、工場見学受入施設などの産業観光資源に、観光施設、祭り、イベントなど大垣市や西美濃地域のあらゆる魅力を組み合わせ、交流人口のさらなる拡大を図っていく。加えて、来訪された観光客の方に十分に満足いただける、西美濃地域ならではの「おもてなし」の構築に向けた研究にも力を入れていきたい。

姫路城修理で「匠の技」を観光資源に ―伝統瓦づくりなどを親子ツアーで体験―



姫路市観光交流推進室 係長

柿本英夫

屋根瓦の葺き直しなど
半世紀ぶりの大修理

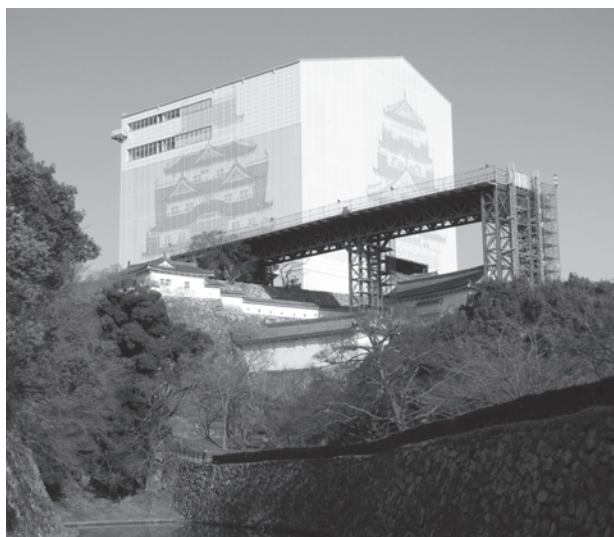
姫路城では、昭和三十一年から三十九年にかけて、大天守、小天守およびそれらを結ぶ渡り櫓の修復工事を行った。これが世に言う「昭和の大修理」で、大天守を一旦解体した後再び組み上げるという壮大な工事だった。

その大修理から約半世紀。傷みや汚れのはげしくなった漆喰壁の塗り直しや屋根瓦の葺き直しを中心に五年をかけて行う保存修理工事に、平成二十二年十月から着手している。

通常文化財の修理というと観光客が激減し観光にとっては大きな痛手となる。平成二十二年度の姫路城入城者は四十五万八千人と「昭和の大修理」が終わった昭和三十九年以降最少となった。しかし、今回はそれを逆転の発想で新たな観光資源とするものである。

今回の修理は約半世紀ぶりとなる大天守の修理であり、大がかりな修理の様子を目の当たりにして

きる貴重な機会である。姫路城大天守修理見学施設「天空の白鷺」により、世界遺産・姫路城を支える保存修理の現場や匠の技を新たな観光資源として、産業観光という視点から新たな魅力を発信するものである。



「天空の白鷺」の外観

見学施設「天空の白鷺」を
約3年間、常設的に公開

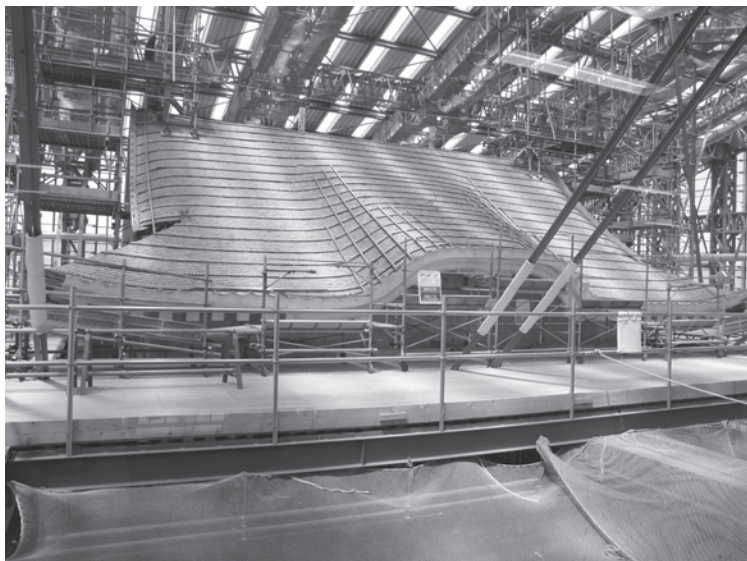
「天空の白鷺」では、大天守を覆う素屋根内にエレベータを二基設置し、素屋根八階及び七階に見学者用フロアを整備して公開している。見学対象となる上層部では壁面を下地から修理し、屋根は約八万枚の瓦を全て葺き直す予定であり、様々な修理現場を見ることができる。

また、通常では見ることのできない十三階相当の高さから見る大天守は圧巻だ。エレベータもシースルー構造であり、一階から八階まで約一分間の昇降中も石垣から最上層まで大天守を間近に見ることができる。フロアでは修理への理解を促進するため、姫路城の瓦の特徴や製造方法、保存修理のプロセスなどを紹介している。

これまでの文化財保存修理現場の公開は、数日程度にとどまる場合が多かったが、今回は素屋根が設置されている約三年間、常設的に修理現場を公開する。これは日本で初めての取り組みだ。

また、今回「天空の白鷺」により、車椅子利用者も大天守最上部を間近に見ることができる。大天守にたどり着くまでに二五度程度の急傾斜が三カ所あるが、寄贈された電動アシスト車いす五台を貸し出し、市民ボランティアも待機している。また、車椅子利用者は本人と介助者を含め四人まで入場無料としており、好評を博している。

「天空の白鷺」では、英語・中国語・韓国語による外国語案内や危険箇所での介助などを行う市民ボランティアが活躍している。また、市内には観光ボランティア団体がいくつかあるがこれらに

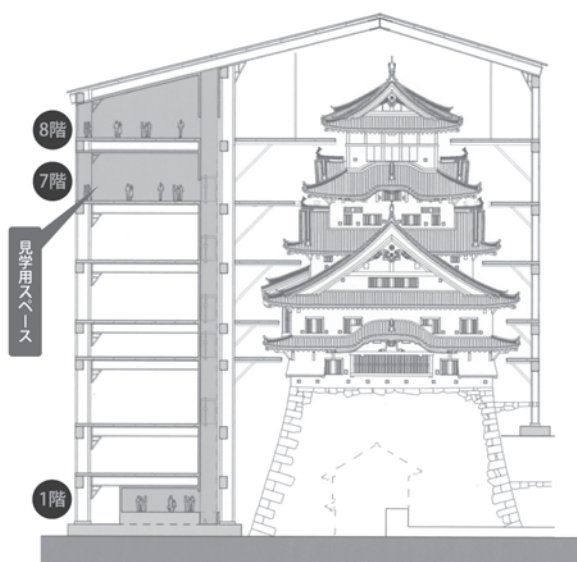


「天空の白鷺」8階から望む大天守大屋根

職人との触れあいも観光資源

対しても事前に研修を行い天空の白鷺に見学者を迎えるため全市挙げて取り組んでいる。

五月十三日から二十日までの間に「天空の白鷺」を訪れた方のうち四百五十八人にアンケートしたところ五・一％の方に「期待以上」という評価をいただいた。県外からの見学者はアンケート回答者の四八％と半数近くを占め、今回の取り組みの注目度を再確認することができた。また、再訪の意思についても、「必ず来る」「たぶん来る」を合わせて八四％に上った。



「天空の白鷺」断面図

姫路市では、これまで姫路の産業観光資源を紹介したガイドブックを発行してきたが、今年は初めて親子向けのものづくりガイドブックを発行し、「天空の白鷺」をはじめとした姫路の産業観光資源を将来を担う子どもたちに伝えようとしている。また、このガイドブックの発行にあわせて「姫路市親子産業観光ツアー」を開催する予定である。

このツアーでは、「天空の白鷺」を見学した後、伝統の「いぶし瓦」を作り続ける工場で、職人から直接指導を受けながら鯨等を作る体験をしたり、仏壇製造工場で製造工程の見学後、金箔押し体験をしたりするなど職人との触れ合いができる。

技術継承につながる産業観光を目指して

るようにしている。これらの経験は、子ども達にとって大きな魅力となるのではないかと考える。

世界遺産・姫路城は、今回の大規模修理に限らず毎年何らかの修理を行っている。それが間接的に修理技術の継承に寄与している面もある。しかし、ただ仕事が確保されているというだけで、職人が育つわけではない。

今回の取り組みを通じて、一般人からの素直な感動や技術に対する賞賛に接することで、自らの技やその意義を確認することができ、職人の仕事に対する矜持の醸成に寄与するのではないかと考える。ひいては長期的な人材育成へとつながれば理想的である。

実際これまで市内で産業観光に取り組んでいる企業においても、「社員の意識が根本から変わった」「自分たちの技術に観光客が興味を持つてほめてくれる」「自分たちが価値あるモノを作っているんだと胸を張れるようになった」などの声が聞かれる。このような受け入れ側のメリットは伝統工芸だけにとどまるものではなく、今後幅広い企業に産業観光への取り組みが広がるよう働きかけたいと考えている。

文化財修理の常時公開は、日本で初めての取り組みである。世界遺産姫路城がこのような取り組みを行うことは全国の文化財所有者あるいは管理者に大きな影響を与えるものではないか。今後の全国での取り組みの参考事例となり全国にこのような取り組みが広がることを期待する。

ものづくり技術の魅力を再発見 ―観光客の「回遊性」図るため企業・市民が協力―



社団法人広島県観光連盟

● 濱下英樹

呉市は広島県の西南部に位置する瀬戸内海に面した、気候温和で自然環境に恵まれた臨海都市である。また、平成十七年三月には、瀬戸内海という世界に誇る財産を共有する近隣八町と合併し、古代から現代に至るまでの様々な歴史や豊かな文化、美しい自然を有する海のまちとして、海岸延長三百^{キロ}メートル、県内の瀬戸内海国立公園の約四割を占める新生呉市が再出発した。

明治以降は海軍のまちとして、また、戦後は造船・鉄鋼・パルプ・機械金属などを中心とした臨海工業都市として発展してきたため、最近までは観光都市としてのイメージはほとんどなかったが、観光が二十一世紀を担うリーディング産業として注目され、全国各地で様々なアピールがされる中、呉も観光都市としてのまちづくりに向けて動き始めている。

大和ミュージアム効果で
入り込み観光客数は倍増

そうした中、海と共に歩んできた呉には他の都

市にない歴史と歴史遺産などが数多くあることに着目し、平成十七年四月に大和ミュージアムがオープンし、これを核とした「呉ならではの観光地づくり」の第一歩を踏み出している。

こうしたコンセプトを基に建設された大和ミュージアムは、平成十七年のオープン以来、全国のマスコミに大きく取り上げられ、その展示内容が高く評価されている。昨年の秋には、オープンから六年で六百万人を超える来館者をお迎えすることができた。今なお、全国から多くの観光客の皆様にお越しいただいている。

大和ミュージアムのオープンを機に、呉市の入込観光客数は一挙に二倍強の年間三百五十万人に膨れあがったところではあるが、この賑わいをいかに市域全体に波及させていくかということが、目下の課題である。

「市民観光講座」を通じ
市民の意識も醸成

前段の課題である「観光客の回遊性」を図るに

は、「産業観光」が一つのキーワードであると考えており、大和ミュージアムの展示方針の一つでもある「呉の技術」をより多くの方々に認識していただくことにより、回遊性を高めていきたい。

そのためには、まず、地元の方に「観光地・呉」という市民意識を醸成することが必要であると考え、従来から実施している「市民観光講座」において、市内各地の地域に根差した産業文化財や特産品等の生産現場や地域文化等にふれていただき、新たな呉の魅力を再発見していただきたいということから、地元ボランティアガイド団体である「呉観光ボランティアの会」や地域のまちづくり団体等の案内により実施している。

また、本講座の受講により、「呉観光ボランティアの会」の活動についても理解を深めていただくとともに、おもてなしの心を醸成し、会員としての活動に関心をもつていただくことを目的としている。

平成二十二、二十三年度の事例

1. 名跡等及び進水式見学

呉市の最東端「安浦町」のコンクリート船「武智丸」、住吉神社、地元特産品売場などの見学及び隣接地域である川尻町にある「神田造船所」(船舶艦艇の設計建造修理、海洋構造物及び大型鉄構製品の造修など)の進水式の見学。

2. 市内企業視察及び名跡巡り

(1) 大塩するめ(するめの加工並びに販売、海産物の販売、菓子類、蒲鉾、竹輪、各種佃煮などの製造販売)及び仁方地区やすり工場(年間千



酒蔵「水龍」の見学



セーラー万年筆の工場見学で説明を受ける



全国シェア95%「仁方やすり」見学

百万本製造、全国シェア九五%）の見学、同地域の八岩華神社（仁方地区）をボランティアガイドの案内により見学。

（2）ミットヨ（測定機器を製造。ノギス、マイクロメータの国内シェアは九〇%以上）の視察、眞光寺の梵鐘や善通寺の手水鉢など史跡巡りの後、郷原地区のデイスコ（半導体ウエハの精密切断・研削・研磨装置などの製造、世界シェア七〇%）の見学、スクール食品の工場即売会（毎月第二、第四金曜日に実施）。

（3）セーラー万年筆（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどを製造）で製造工程を直に見ながら見学し、その後吉浦地区の八幡神社、誓光寺など、史跡を同地域の郷土史研究家及びボランティアガイドの案内により見学した後、同地区の酒蔵「水龍」を視察し、呉市花「椿」の炭を使用した日本酒の製造等について説明を受けた。

課題と方向性

歴史的・文化的価値のある産業文化財や生産現場、特産品等を観光資源とし、それらを通じて呉市の文化や歴史にふれる「体験型観光」や「産業型観光」は、地域に根差した体験・学習型の新たな観光資源として注目されていることから、企業や地域住民等の協力を得ながら、持続可能な観光資源として定着させたい。ひいては、これらの取り組みによる呉観光の回遊性につなげていきたい、と考えているところである。

そのためにも、本講座の受講をきっかけに呉の魅力やものづくりの技術の素晴らしさを再発見していただけるよう、産業観光を織り交ぜた講座として続けていきたい。

また、実施状況を「くれ観光情報プラザ」（呉

市の観光案内スポット）への掲示や、参加者の口コミ等により、受講者以外の方に魅力を認知していただければと考えている。併せて、旅行エージェンツの招聘、エキスカーシヨンの実施等により、これらの取り組みを観光商材とし、魅力付けしていくことで、市外・県外からの入込観光客の増加にも寄与できるものと確信している。

その他の事例

呉市は「観光圏の促進に関する法律」による「広島・宮島岩国地域観光圏」に参画しているが、隣接町である「熊野町」では、同観光圏の平成二十二年事業として地域の伝統工芸品である「熊野筆」（全国シェア八〇%）を活用した産業観光推進のため、「大人の社会見学」と題し、町内の筆関連の事業所の散策、熊野筆をテーマとした施設「筆の里工房」において化粧筆づくり体験を実施している。

また、広島県が提唱している「瀬戸内海の道構想」内の「新たな観光ルートの創造プロジェクト」の一環として、「職人」をテーマに、海都「呉」、筆都「熊野」、酒都「西条」を結ぶ、「山陽アルチザン（職人）街道観光キャンペーン」を実施し、観光ルートの周知と地域内の滞在時間の延長を図っている。

工場見学から環境エコ施設まで多彩 — 周辺都市を含め38企業が産業観光に参加 —



北九州市産業経済局 観光部観光・コンベンション課 観光係長

● 高宮祐二

「産業都市」「環境モデル都市」として

北九州市は、一九〇一年の官営（国営）八幡製鐵所の操業を契機に、鉄鋼・機械・化学などの国の基幹産業が集積し、日本の「四大工業地帯」の一角を担う産業都市として発展してきた。

それから百年余、モノづくりの精神を貫きながら、新たな産業の創出にも取り組んでいる。現在では、自動車産業や情報通信産業などの集積が進むなど「産業都市・北九州市」は健在である。

一方で、こうした工業集積による産業発展の過程で、深刻な「公害」に直面した時期があった。一九六〇年代、北九州地域の大气汚染は国内最悪の状態となり、洞海湾は工場廃水により魚も棲めない「死の海」と化した。

しかし、子どもの健康を心配した母親たちの声をきっかけに、市民、企業、行政が一体となった取り組みが急ピッチで進められ、環境は急速に改善された。現在では青い空と青い海のある、かつての自然豊かな北九州市へと蘇っている。

この公害克服の過程で培った環境技術やネットワークが現在も北九州市に残り、環境分野の取り組みに活かされている。二〇〇八年には「環境モデル都市」に認定された。本市ではこうした都市の特性を活かし、「産業」と「環境」を一つの観光素材として捉え、積極的に活用している。

産業観光の「先駆者」を自任

わが国屈指の産業都市として発展してきた北九州市は、産業観光の先駆者ともいうべき都市であり、早くから産業をテーマにした観光振興に取り組んできた。

北九州市の産業観光の大きな特徴としては、大規模製造業（鉄鋼・化学など）から、最新鋭の機械設備（自動車、ロボット、半導体など）、生活に身近な製品（石けん、新聞、衛生陶器など）や交通（ＪＲ車両、フェリー）など、バラエティに富んだ工場見学ができること、また、企業の工場

見学とは別に、かつての産業を支えていた貴重な産業遺産や、イノベーションギャラリ、環境ミュージアムといった公的な学習施設などが多く存在しているため、幅広い見学ができることも魅力である。

現在、北九州市の産業観光には北九州市及び周辺都市の三十八事業所（企業）が参画している。こうした受け入れ事業所と円滑に事業を進めるため、年に数回、各事業所の担当者と一緒に、工場見学についてのアイデア出しや意見交換、合同視察会の場を設定するなど、官民共同で進める体制を推進している。

二〇一〇年は約二十五万人（市外企業二社を含む）の産業観光客が訪れており、うち海外からも約一万五千人が訪れている。

こうした取り組みを背景に北九州市は二〇〇九



工場見学



廃棄処分場にドングリを植樹



工場夜景

年、全国産業観光推進協議会（社団法人日本観光協会）が主催する「第3回産業観光まちづくり大賞」において、最高賞の金賞を受賞した。

北九州市だからできる 「環境修学旅行」

過去の厳しい公害を克服し、「環境モデル都市」として生まれ変わった北九州市には、リサイクル事業の種類や規模において全国でトップクラスの「北九州エコタウン」や、日本最大級の「北九州次世代エネルギーパーク」をはじめ、様々な環境関連企業や環境学習施設が集積している。

そこで国内外から高い評価を受けている環境の取り組みを新たな観光素材として活用した「環境修学旅行」を昨年度よりスタートした。

この修学旅行の特徴は、高度で先進的な環境関

連施設や技術の見学に加えて、「産業廃棄物処分場跡地での植樹」や、「廃材を利用した風力発電キットづくり」「生ごみコンポストづくり」といった環境に関連した体験学習を盛り込んだ点で、北九州市ならではの修学旅行である。

昨年度は、九州内から七校六百四十五人が同修学旅行を行い、今年度は現時点で関西エリアの中学校も含め十一校九百六十六人が予定されているが、次世代を担う多くの若者に、本市の環境への取り組みを学んでもらうことで、環境意識の醸成や育成を促し、国内外への情報発信にもつなげたいと考えている。

女性に人気の工場夜景観賞ツアー

さらに産業都市としての特性を活かした新たな

展開として、工場

夜景に着目した「工場夜景観賞ツアー」に取り組んでいる。

工場夜景は、特に女性に人気があり、観光振興の観点からも、滞在時間の延長促進や宿泊への誘導の可能性が広がることから、昨年初め、まず市内の工場景観観賞ポイントを探

すことからスタートした。

次に昨年十一月にアピールも兼ねた一般公募による「工場夜景観賞モニターバスツアー」を実施したところ、募集定員六十人に対し、なんと二百五十八人もの応募があり、福岡県でも高い関心があることがわかった。現在「北九州工場群夜景観賞バスツアー」として、民間旅行会社によって商品化され、大変好評を得ている。

また、今年二月には、国内で工場夜景観光を推進している「川崎市」「四日市市」「室蘭市」と連携し、PRや集客促進事業を共同で進めていくための「日本四大工場夜景エリア共同宣言」を発表した。

今後は、こうした新たな展開も含め、この夜景観賞を発展させていくとともに、これをきっかけとして北九州市へ来ていただいた方々が、街の観光を十分に楽しみ、「また来たい」と思っていただけよう、北九州市の観光力アップに積極的に取り組んでいきたいと考えている。

今後の取り組み

今後も「ものづくりの街・北九州市」の強みを活かした幅広い産業観光・環境観光を推進していくため、産業観光協力事業所や環境関連企業との連携をより一層深め、本市ならではの観光資源としての魅力アップを図っていくこととしている。

また、国内だけでなく海外に対しても、積極的な観光客の誘致を図り、宿泊客の増加を図ること、市内の観光事業者などへの経済効果も生み出し、地域経済の活性化につなげたいと考えている。

産業観光によるまちづくり

地域の魅力を内包する産業観光資源

—海外でも主要産業で盛んな工場見学—

財団法人日本交通公社企画課長

● 牧野博明

1. 「まちづくり」へと進化する産業観光

産業観光が全国的に拡大している。「産業観光」という言葉が本格的に使われ始めた二〇〇〇年頃は、工業地帯に属する都市、もしくは鉱山業や繊維業、社会インフラなど太平洋戦争以前に建設・活用されていた施設（産業遺産など）を有する地域が中心であったが、現在に至るところで様々なタイプの産業観光が見られる。

以前は単に「産業観光Ⅱ工場見学」と捉える傾向が強かったが、二〇〇一年度から継続する「全国産業観光フォーラム」による啓発活動、そして二〇〇四年十一月にまとめられた「観光立国推進戦略会議」や二〇〇八年七月に閣議決定された「国土形成計画（全国計画）」において「産業観光」が明記されたことなどにより、産業観光の意義や重要性への理解が深まってきたように思われる。

実は、産業観光は昔から全国で行われていた。「産業観光」という言葉が使われていなかった時

代は、「工場見学」「社会科見学」「体験学習」などと表現されていた。見学・体験を行う側からすれば今も昔もそれほど変わらないように思われるが、受け入れる側を見ると、そこには大きな変化が表れている。

第一に、受け入れ施設の意識の変化が挙げられる。従来の産業観光では、消費者への製品等のPRや小中学校の社会学習への貢献という側面が強くみられた。このため、消費者に直接関わることをない製品を扱う工場の多くは、それほど積極的な受け入れを行っていなかった。特に、都市計画法に基づく「工業専用地域」や「工業地域」等に立地する工場には何となく立ち寄り難く、地元住民にとっても謎につつまれた存在となっていた。

これに対し、現在は、産業観光への意識や理解の向上、またCSR（企業の社会的責任）の観点からの情報開示や地域との共生に対する意識が高まってきたことなどにより、幅広い業種や分野において見学者を受け入れるようになってきた。

その結果、地元住民を含む見学者の側において

も、工場等の産業施設に対する意識が変化し、これまで以上に親しみやすい（怖くない）ものという認識が高まりつつあるように感じられる。特に地元住民にとっては、地元の産業を再認識するうえで良い機会となっているのではないか。

第二に、地域での受け入れ対応の変化があげられる。従来は各施設が単独で受け入れを行うケースが多く見られた。なぜなら、先述したような製品PRや社会学習への貢献が目的であれば、単独での対応で間に合うからである。また、施設によって受け入れに対する意識や考え方に大きな隔たりがある場合、無理に協力せずとも単独で行う方が効率的である。

これに対し、産業観光への意識が高まりつつある現在、全てを単独で行うよりも、ある部分については施設同士が協力し、またある部分については仲介組織（例えば商工会議所など）が対応することで効率的となる場合もある。このような連携が拡大すると、次に述べる「まちづくり」の実現につながる可能性が出てくる。

第三に、産業観光の位置づけの変化があげられる。これまでに述べたとおり、従来は各施設がそれぞれ行えばよいという程度の認識であったが、現在は「まちづくり」の一方策として捉える地域が増えていく。

これは産業観光に限った話ではなく、「ニューツーリズム」や「着地型観光」などと呼ばれている新たな観光タイプも同様である。産業観光の場合、都道府県や市町村などの行政や各地の商工会議所・青年会議所等が音頭を取り、まちづくりを目指すケースが多く見られる。



高くそびえる工場の夜景（川崎市）
提供：川崎産業観光振興協議会



海から見た工場の夜景（川崎市）
提供：川崎産業観光振興協議会

2. 産業観光の新たな視点を 取り入れたまちづくり

様々なタイプの産業観光が存在するなかで、ここでは新たな視点から「まちづくり」につなげようとしている最新の例をいくつか取り上げる。

①工場施設の新たな資源性

工場を活用した産業観光といえば、通常は工場内部の見学が思い浮かばれるが、最近では工場の外観・外装を楽しむ産業観光が注目を浴びている。その一例が「工場夜景観光」である。夜景を山頂や上空から俯瞰するツアーはもともと人気が高く、これを工場にも当てはめることにより、新たな観光スポット及び客層を創造するというものである。この工場夜景観光の特徴として、

・ 俯瞰だけでなく陸上からの仰視も見応えがある
・ 工業地帯は沿岸部に集積していることが多いため、海上からの眺望も見応えがある
などがあげられる。

既に、北海道室蘭市、神奈川県川崎市、三重県四日市市、福岡県北九州市では工場夜景ツアーに取り組んでおり、二〇一一年二月二十三日には、これらの都市が企画した「全国工場夜景サミット」が川崎市で開催された。今後も、工場夜景観光の拡がり期待される。

②地域活性化イベントとの融合

地域によっては、産業観光だけでなく、多様な資源を有するところがある。そのような場合、産業観光だけを単独で推進するのではなく、産業観光を一つの資源・要素と捉え、様々な資源・要素を取り込んだ仕組みづくりを行うことにより、地域全体でのまちづくりや地域活性化につながる可能性が高い。

その好例が「オンパク」である。もともとは二〇〇一年に別府で行われた「ハットウ・オンパク」（温泉・泊・覧会）が原点であり、温泉で元氣やきれいになるだけでなく、町歩き、里山での地元の人との交流、歴史的な空間を活用した地元アーティストのイベント、地元の採れたて素材を使った食事などの多様な要素を

駆使し、地域の魅力を再発見するというものである。この考え方や活動内容に共感した全国九地域が仲間として加わり、全十地域によって平成二十二年四月に「一般社団法人ジャパン・オンパク」が設立され、全国的な活動として取り組まれることとなった。

その一地域である福島県いわき市で行われている「フラオンパク」には、産業観光の要素がふんだんに取り入れられている。例えば、

・ かつての炭鉱の町であり、「炭坑遺跡を巡るツアー」は毎回人気が高い
・ 複数の工場において、バックヤードツアーを実施している
・ 商店街には昔ながらの気さくなお店が多く、まち歩きを通じて地元の生活文化に触れることができる

——など、同市の特徴が活かされたプログラム



ガイドによる説明（いわき市）



「フラオンパク」でのまち歩きの様子（いわき市）



散策路の案内板 (常滑市)



散策路の壁に並べられた甕 (常滑市)

となつてゐる。

なお、同市は

東日本震災で

被災し、一部地

域や施設が甚大

な被害を受け

た。いち早く復

興して町が元氣

を取り戻し、「フ

ラオンパク」が

再開されること

を願うばかりで

ある。

③伝統産業とま

ちづくりの融

合

地域を支えて

きた伝統産業

が、地域の活性

化を目的に、ま

ちづくりに貢献するケースも増えている。

中部地方には、瀬戸市、常滑市、多治見市など古くからの焼物の産地が多い。陶芸ブームの影響もあり、近年は見学や体験目的で産地を訪れる観光客が多くみられる。そのため、各地において、窯、販売所、展示施設、広場、飲食施設、駅、駐車場等を結ぶ散策コースの整備が行われている。

その際に、散策路については、単に整備するだけではなく、壁面や案内板等に産物・製品を用いて地域の特徴を表す場合が多い。それにより、産物・製品をアピールするだけでなく、地域の統一

感を持たせるとともに、移動中の疲労や退屈な気分を取り除く役割を果たす。

これらの取り組みにより、

・「点」(各施設) から「線」(散策路) へ、そして「線」から「面」(まち全体) へと展開していく

・陶芸関連施設だけでなく、様々な種類の施設や店舗等も関わることにより、地域が一体となる

ことが期待される。

④修理・修復も産業観光の重要な要素

通常の姿だけでなく、修理・修復を行っている姿やその過程も見てもらふことにより、地域の活力を断つことなく持続させるといふ発想に至ったのが姫路城である(P24~25で紹介)。

世界遺産であり、兵庫県姫路市の観光の目玉である姫路城は、平成二十一年十月より大天守保存修理事業が行われている。修理・修復期間中は大天守全体が素屋根で覆われており、外部はもちろん城内の庭園からもあの美しい大天守を望むことができないため、当初はこの期間中の観光客数の大幅な減少を覚悟していた。しかし、「修理・修復の現場をみせる」という新たな発想をもとに、

・「世界遺産の修理・修復」という付加価値を提供する

・姫路へ訪れた人を落胆させないような対応やもてなしを行う

・それにより、観光客数の減少を極力抑え、地域経済への影響をできるかぎり小さくする

・「世界遺産の修理・修復」という付加価値を提供する

ことに地域が一丸となって取り組むこととなった。今回の修理・修復は四十五年ぶりの大規模なものであり、一連の取り組みが観光客の動向や地域経済にどのような影響を及ぼすのかが注目される。



姫路城大天守の修復の様子 (姫路市)



素屋根に覆われた大天守 (姫路市)

3. 海外における産業観光によるまちづくり

海外においても、産業観光は至るところで行われている。工場見学を例にとると、

▽自動車工場 (イタリア・トリノのフィアット工場、ドイツ・ヴォルフスブルクのフォルクスワーゲン工場、ドイツ・ミュンヘンのBMW工場、ドイツ・シュトゥットガルトのメルセデス・ベンツ工場、アメリカ・デトロイトのフォード工場など)、▽航空機製造工場 (フランス・トゥールーズのエアバス工場、アメリカ・シアトル郊外のボーイング工場など)、▽飲食工場 (アイルランド・ダブリンのギネス工場、ベルギー・モントルー郊外のネスレチョコレート工場、イギリス・バーミンガムのキャドバリーチョコレート工場など)、▽化粧品工場 (フランス・プロヴァンスのロクシタン工場など)、▽陶器製造工場 (ドイツ・マイセン



ロッテルダム港の荷役施設



港湾部にある石油コンビナート施設

の工場など)

——というように、種類・内容は多岐に渡る。

ここでは、複数の施設や工場が参画することにより、まちづくりにつなげている例として、オランダ・ロッテルダムを取り上げることとする。

ロッテルダムは長年にわたり貿易港として栄えてきた都市である。第二次世界大戦では戦禍に巻き込まれ多大な被害を受けたものの、現在もヨーロッパ最大の貿易港を有する港湾都市であり、物流の要衝としての役割を担っている。

観光に関しては、一九九七年に国が観光客の受け入れに重点を置くことをきつかけに、ロッテルダム市が港湾域の本格的な観光活用を方針として掲げ、産業観光を推進することとなった。

ここでは、産業観光希望者が産業観光施設に直接依

頼・予約を行うのではなく、「Industrial Toerisme Rotterdam (ITR)」という組織が仲介する形を取っている。ITRでは、予約を受ける際に希望者のプロフィールや訪問理由などを詳しく聞き、希望する産業観光施設に伝える。施設の確認が取れると、スケジュール調整やガイドの手配等を行い、全行程を固める。

ガイドは企業を退職した人が多く、それぞれ異なる専門知識を有するため、ITRがツアー内容に適した人を選定する。オーダーメードのためツアー料金は比較的高額であるが、その料金に見合うサービスを提供しているという自負を持って対応している。

参画する事業者・施設は、港湾域に立地するターミナル施設会社、石油会社、フェリー会社、市の汚泥施設に加え、市内中心部にある海事資料館や各種建造物なども含まれる。なお、二〇〇七年より都市の競争力強化のための産業観光のあり方についての研究プロジェクトが始まり、参画企業の拡大などを課題としてあげている。

このように、ロッテルダムもわが国と同様に産業観光の推進に力を入れているところであるが、最後にロッテルダムの産業観光の特徴として二点ほど指摘したい。

① 仲介・コーディネート役の組織が存在する

ITRが仲介役として全てのコーディネート業務を担うため、産業観光希望者のニーズにきめ細かく対応できるとともに、参画する企業や施設

の負担を減らしている。また、ロッテルダム全体での産業観光の状況を一カ所でまとめて把握できるため、将来的なまちづくりやプランニングに率直に反映させやすい。

わが国の場合、産業観光分野では類似の組織はないが、川崎市では「川崎産業観光振興協議会」がいち早く組織され、協議会が各種事業を企画立案し、行政、商工会議所、川崎市観光協会、参加企業等が事業を分担し、実施している。こうした事業全体を仲介、コーディネート、統括する組織への注目が集まりつつある。

② 内容に見合う料金設定を行っている

ロッテルダムでは産業観光の内容・サービスを充実させるといふ考え方のもと、適正料金で対応している(割引は行っていない)。わが国においても、産業観光の事業化へ向けたビジネスモデルの構築が課題となっており、検討を行ううえでの参考になるものと思われる。

参考資料: 『産業観光への取り組み』(財団法人日本交通公社発行)



市内中心部にある、世界初の歩行者天国「ラインバーン」



荘厳な「ロッテルダム市庁舎」

産業観光によるまちづくり

観光立国目指し関係府省も振興策 ―産業観光による企業・地域の連携を支援―

観光庁・経済産業省

地域の「光」→産業観光

「観光」という言葉の起源は、「国の光を観る、もって王に貢ぐるによろし」という中国の儒教の古典「易経」から来ていると言われている。「光」というそれぞれの地域の産業・生活・景観・歴史・文化等を観ることの重要性が示された言葉である。

産業という「光」を活かし、その技術等の歴史を伝承することや、産業を生んだ文化を学ぶことは将来的な産業発展にも重要である。

観光立国推進基本計画では、産業観光を「歴史的・文化的価値のある工場等やその遺構、機械器具、最先端の技術を備えた工場等を対象とした観光で、学びや体験を伴うもの」とし、魅力ある観光地の形成のひとつの要素として位置づけている。

現在、観光の形態が「団体旅行」から「個人旅行」へと変化し、旅行者のニーズも多様化してい

る。また、従来「物見遊山型」だった観光が、「参加体験型」志向に変わって来たりもしている。

各地域には、地域ならではの観光資源を活用した魅力ある旅行商品を創出・流通させ、創意工夫を活かした観光地づくりを行うことが求められているところだ。観光客に対して多様な観光商品を提供し、「見る」だけではなく「体験・学習する」観光についても幅広く対応していく必要がある。そして「産業観光」は、まさにその期待に応えるものである。

産業観光の魅力を高めるには、「地域固有性・地域特性」という視点が重要である。例えば、自然風土とのかかわり、歴史文化との関連等、産業立地における地域性を反映し、「地域でのストーリー性」が濃厚であればあるほど、観光地としての魅力も高まる。

さらに、産業観光の魅力を高めることは、「ホンモノの魅力、現場の魅力を伝えることによる製品・商品の高付加価値化」「新製品開発、用途開発、研究開発、共同研究、販路拡大などにつながる可

能性」「企業理念、技術、誇り、地域にその企業がある意味や役割の発信」「従業者の意欲向上、工場内の整理整頓による品質への好影響」「次世代のものづくり人材の育成、確保」など様々な可能性につながる。また、日本の誇るべき産業を観光という観点から見つめ直し、世界へPRする機会を創出することにもなる。

観光連携コンソーシアムにおける検討

観光立国の実現は、今後の我が国の成長戦略の柱として位置づけられるべき最重要課題だが、政府としての取組を一体的・総合的に推進するためには、より一層の省庁間の連携強化が不可欠である。このため、国土交通省に観光立国推進本部（本部長・国土交通大臣）を設け、観光立国の実現に向けた推進体制の強化を図ることとしている。

平成二十二年一月より、観光立国推進本部の下に設置された観光連携コンソーシアム（座長・国土交通副大臣）において、エコツーリズム、グリー

観光立国推進基本計画(平成19年6月 閣議決定)に 位置付けられたニューツーリズム	
<定義>	
エコツーリズム	自然環境や歴史文化を対象とし、それらを損なうことなく、それらを体験し、学ぶもの(ホエールウォッチングや植林ボランティアツアーなど)
グリーン・ツーリズム	農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動(農作業体験、農林漁家民泊、食育など)
文化観光	日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とするもの
産業観光	歴史的・文化的価値のある工場等やその遺構、機械器具、最先端の技術を備えた工場等を対象とした観光で、学びや体験を伴うもの
ヘルスツーリズム	自然豊かな地域を訪れ、そこにある自然、温泉や身体に優しい料理を味わい、心身ともに癒され、健康を回復・増進・保持するもの
その他	フラワーツーリズム 長期滞在型観光 等

ン・ツーリズム、文化観光、医療観光、スポーツ観光等の多様な観光メニューについて、関係省庁の連携による総合的な振興策の検討を行っている。

産業観光については、平成二十二年五月に開催された第五回観光連携コンソーシアムの議題として取り上げられており、関係府省の連携方策について、有識者を交えて意見交換を行ったところである。詳細については、観光庁ホームページをご覧ください。

関係省庁における施策の例

産業観光等に取り組む地域が利用できる主な施策として、次のようなものがある。また、観光庁では「観光地域づくり相談窓口」を設け、観光地域づくりをサポートしているので、ご活用ください。

【観光庁観光地域振興部…03―5253―8111(代表)】

■観光地域づくりプラットフォーム支援事業(観光庁)

「観光地域づくりプラットフォーム」とは、着地型旅行商品の販売を行うため、地域内の着地型旅行商品と市場(旅行会社、旅行者)をつなぐワンストップ窓口としての機能を担う事業体である。

※着型旅行商品…旅行先の地域が主体となり、産業・生活・景観・歴史・文化等の地域ならではの観光資源を活用して造成された旅行商品

観光地域づくりプラットフォーム支援事業では、滞在型観光の素地ができてつつある観光圏において、この「観光地域づくりプラットフォーム」の形成を促進し、着地型旅行商品の企画・販売、人材育成等を行う取組を支援している。

※観光圏…自然、歴史、文化等において密接な関係のある観光地を一体とした区域であり、その観光地同士が連携して二泊三日以上の滞在型観光に対応できるよう

に、観光圏整備法に基づき観光地の魅力を高めようとする区域

滞在型観光地づくりの例…

「富山湾・黒部峡谷・越中にかわ観光圏」(富山県…魚津市、滑川市、黒部市、入善町、朝日町)

※観光圏整備事業費補助金(平成二十二年度まで)を活用

平成二十一年春にオープンしたYKKセンターパークを核として、宇奈月温泉や産業観光施設等をつなぐシャトルバスの運行実証実験を行い、駅や温泉と産業観光拠点施設の移動利便を向上させ、周遊・滞在型観光地づくりを行った。

また、支援制度を活用し、様々な企業を見学できる産業観光モニターツアーを実施した結果、お



YKKのシャトルバス



工場見学の様子

お客様から高評価を得られたため、翌年度からは民間企業三社が合同で出資し、民間主導のツアー企画催行に至った。

■顧客満足型旅行商品推進事業（観光庁）

各地域において取り組まれている地域の特色ある観光資源を活用して造成された旅行商品（エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、文化観光、産業観光、ヘルスツーリズム等）について、マーケティング、商品造成、販売、商品改良等の実態を把握し、顧客満足度を高めるための自主的な取組を促進させるための方策を検討する事業である。

具体的には、先進地への派遣や専門家の招請等を通じて、旅行者にとって魅力ある旅行商品が造成され、観光による地域活性化が図られるよう意



企業の方による学生への講演の様子

欲ある地域を支援していく。

■外国人旅行者に対する地域資源の意識調査事業（観光庁）

訪日外国人旅行者三千万人時代の実現に向けて、外国人旅行者のさらなるリピーター化及び地方への来訪促進を図るためには、各地域ならではの魅力について外国人旅行者が体験しやすくなる環境を整えることが必要と考えられる。

本事業においては、各地域において取り組まれている地域の特色ある観光資源を活用して造成された旅行商品（エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、文化観光、産業観光、ヘルスツーリズム等）について、地域側と共同で、通訳案内士の派遣やガイドマップ、ホームページ等の多言語化等

を行い、外国人旅行者受入環境整備に向けた課題整理と、調査対象地域において外国人によるCS（顧客満足度）調査を実施し、地域の観光資源に関する外国人の意識・関心や受け入れ環境整備の効果等について、調査・検証を行う。

■地域集客・交流産業活性化支援事業（経済産業省）

本事業は、観光集客の観点から地域の活性化や地域課題の解決を図るために、特色ある地場産業や商店街等の業種横断的な広域連携組織（コンソーシアム）を設立し、地域資源を有効活用した集客力の高い集客・交流プログラムを開発、実施する地域の取組を支援するものである。

具体的には、地域が集客・交流プログラムを具体化し、実現するために必要な基盤整備、人材育成、情報発信、海外需要獲得に向けた取組など、新たな集客・交流産業の創出、高付加価値化、国際化等の取組に対して支援している。

これらの取組を支援することにより、地域における集客・交流産業の競争力の強化等を通じて、我が国の人口減少や急激な少子高齢化に悩む地方都市が国内外の交流人口の拡大を図り、地域経済の活性化や雇用機会の増大につなげていくことを目指している。

本事業は、平成十九年度から実施しており、これまで二十八件の事業を採択し、支援を行っている（平成十九年度・十三件、平成二十年度・平成二十三年・各五件）。

この中で、産業観光をテーマに活動され、着実に成果を上げられている取組として、「東大阪・モノづくり観光」活性化プロジェクト協議会」によ

る取組が挙げられる。

この取組では、東大阪を中心に、世界に通用する技術を有するモノづくり産業を活用した産業観光を展開されている。東大阪に集積する中小企業の高度なモノづくり技術を活用し、修学旅行生等を主なターゲットとした体験観光の展開を図ることにより、地元商店街をはじめとした地域の活性化を推進している。

本協議会は、平成二十一年度に補助事業の採択を受けられて以来、モノづくりへの熱い思いをもった経営者と、修学旅行生等の次世代の若者をマッチングさせ、独自の「モノづくり観光」プログラムを築き上げてこられた。

「教育旅行を教育活動の一環として捉え、学校側の子供への思いを実現してもらうためにサポートする」という共通認識の下、旅行会社との連携により、平成二十二年度では、四十のモノづくり観光プログラムを実施され、二十三校、千百九人の修学旅行生を受け入れられた。

次世代の若者に「モノづくりの心」を伝え、若者の人生観や職業観の涵養に貢献されるときにも、「モノづくり観光プログラム」を通じて東大阪のファンづくりに努めるなど、「モノづくり」と文化の交流都市東大阪の実現に向け、精力的に活動されている。

今後は、修学旅行生に限らず、一般団体や外国人観光客の受け入れも視野に入れた取組を行うとともに、エリア・ツーリズム・エージェンシー（ATA）を設立し、受け入れ体制の整備を計画されるなど、将来を見据えた戦略的な取組を展開されている。

アンテナショップ訪問

「黄門マルシェ〜いばらき農園〜」 銀座の超一等地に茨城県アンテナショップ誕生！

東京・銀座の数寄屋橋交差点側のビル1階に茨城県のアンテナショップ「黄門マルシェ〜いばらき農園〜」が、七月十四日にオープンした。

店名は、茨城県水戸市ゆかりの徳川光圀こと「水戸黄門」に由来。東日本大震災と原発事故の風評被害の払拭と観光誘引を目的に、六カ月の期間限定で開設する。

業務内容は、生産量全国二位を誇る農産物、畜産、水産物、地酒等の食品を展示・販売、飲食。笠間焼など伝統工芸品も販売される。また、観光や農業・古民家体験の情報の提供も行う。

特に、名物の納豆は数多く取り揃え、飲食コーナー「納豆Bar」で茨城産の白米と一緒に食べ比べることができる。また、笠間焼クロ口体験や観光キャンペーンなど各種イベントを開催し、都心に居ながら茨城県に親しんでもらい、話題づくりによる情報発信とイメージアップに取り組み。オープニングでは、サメの飼育日本



黄門マルシェ入口



十三種類の納豆を販売



橋本県知事のスピーチ

一の「アクアワールド大洗水族館」の移動水族館が設置された。

アンテナショップ約二十五店の激戦区

銀座・有楽町周辺は、自治体アンテナショップだけではなく、民間等が運営する物産館も集積しており約二十五ショップある。各ショップは競合

関係にあるが、店舗案内パンフレット「ふるさとアンテナショップめぐり」を共同で発行し集客を図っている。黄門マルシェは、そのルート内に位置するため、PRの場としてポテンシャルが高い。

また、黄門マルシェの出店は、他アンテナショップへも刺激を与え、集積によるシナジー効果で地元の経済を潤すことが期待される。

地域づくり情報課

【ショップ・データ】

店名：黄門マルシェ〜いばらき農園〜（茨城県）
業務内容：特産品販売、飲食、観光案内
電話：03-6280-6368
開館時間：11時～20時（年末年始休）
※H23年7月14日から6カ月間設置
住所：東京都中央区銀座5-2-1 銀座TSビル（旧銀座東芝ビル）1階

トキと共生する佐渡の里山 生物多様性保全へ新たなスタートに

新潟県佐渡市農林水産課
生物共生推進係主任

生物多様性推進室

● 西牧孝行

今年六月九日から十二日に中国・北京で開催された「世界農業遺産(GIAHS)国際フォーラム」で、「トキと共生する佐渡の里山」と「能登の里山里海」がともに、日本では初となる「世界農業遺産」として、国連食糧農業機関(FAO)から認定されました。これは先進国でも初めてのこと。新潟県佐渡市および石川県の担当者から、今回の認定と今後の取り組みについて、寄稿していただきました。(編集部)

世界農業遺産は、農業が持つ食糧の生産という役割に加え、農業によって守られる自然景観や環境、その地に伝わる農民俗文化を起源とする伝統文化の継承など、農業の多面的機能を保全し、持続可能なものにするための活動を認定している。

佐渡市がトキの野生復帰を契機に、トキと人が共生し、生物多様性保全と地域経済が循環することを目的に発足させた「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」は、生物多様性保全と持続的な自然と共生する農業生産活動の面で評価され、また、一方では佐渡金銀山の繁栄が生み出した豊かな農村は、中山間地域の棚田など里山の自然形成や能、鬼太鼓などの農村文化の発展につながり、佐渡島独特の自然、風景、文化を形成し保全し続けてきたことも評価されたと考えている。

この認定は、佐渡の農業や文化を脈々と守り続けてきた市民の長年の活動が実を結んだものと考えているが、世界農業遺産認定はゴールではなく、新たなスタートである。

今回の認定を誇りに思うとともに、佐渡島民は受け継いできたこの

農業の価値を認識し、より一層の持続可能な農業生産活動と里山、自然、文化の保全、そしてトキをシンボルとした生物多様性保全についての取り組みを進めなければならない。

まずは国、県、大学等の専門機関、JAのみならず、市民とも議論を重ね、より具体的な「佐渡GIAHSプロジェクトアクションプラン」を策定するとともに、プランの進捗状況を把握し評価することで、確実な実行を目指す体制を構築する。世界農業遺産は決して過去のものではなく、これから未来に向かって継続していくものだと考えている。

農村環境の保全と 経済発展の循環を目指す

このことから、生物多様性保全を重視した農業のみならず、これまで



トキと人の共生を目指す佐渡の里山

受け継がれてきた中山間地域の棚田や農村文化の保全・継承につ

いては、国の政策とも従来以上に連携して進めていくことが重要となる。今回の認定をきっかけに、米やおけさ柿などの農産物の環境付加価値の向上と販売力強化など、新たなビジネスチャンスの機会も創ってきたい。

このように、生物多様性保全を中心に環境再生、農村文化の継承と経済発展の循環を目指し、GIAHSを未来につなげていくことが佐渡に求められている。

そのために、この世界農業遺産認定とも連携して、里山国際パートナーシップなどの参画の検討を進めており、持続可能な生物多様性保全や農業生産などの面で国際貢献も果たしていきたい。

最後に、これまでGIAHS認定のため尽力いただいた国連大学、農林水産省等関係機関、そして市民や島を応援していただいている方々に感謝するとともに、今後は、佐渡島が一体となって具体的に取り組み、環境再生と経済発展の仕組みが強いものとなり、人と自然が共生する里山の風景、文化、生物多様性保全を重視した農業システムが能登地域と共に日本農業の新しいモデルとして確立されるよう努力を続けたい。

能登の里山里海

能登の自然・文化が世界的に評価された

石川県環境部 里山創成室 ● 川畑瑞恵

石川県の県土の六割を占める「里山」は、そこに暮らす人々が手を入れ、様々な形で活用することによって豊かな自然が維持されてきた場所であり、多くの生きものの生息地となってきた。また、古くから人々の生活と深く関わり、生活・生産活動が営まれてきた「里海」も県内のいたるところに存在している。

本県では、県民の暮らしと関わりが深く、生きものにとっても重要な地域である里山里海の利用保全を中心に、生物多様性の保全に取り組んでおり、この三月には「トキがはばたく石川の実現」を県民共有の目標に掲げ、里山里海の利用保全を中心に据えた「生物多様性戦略ビジョン」を策定した。

そして、四月には専任組織として「里山創成室」を設置し、五月末には地元金融機関の協力を得て、総額五十三億円の「いしかわ里山創成

ファンド」を設けるなど、戦略ビジョンを掲げ所に、里山里海を元気にする施策を強力に進めているところである。

そのような中で、羽咋市以北の四市四町で申請した「能登の里山里海」が、佐渡市の申請した「トキと共生する佐渡の里山」とともに、FAOの「世界農業遺産」に認定された。

この認定は、能登の里山里海を維持してきた千三百年以上の歴史の中で育まれてきた農林水産業や、その暮らしの中で育まれてきた能登の自然、文化、景観などが、次の世代に引き継ぐべき素晴らしい財産として、世界的に高く評価されたものと受け止めている。

今後は、先進国として初めて認定された世界農業遺産を、積極的に世界に向けて発信することで、その価値を高めるとともに、これまでに世界で認定された地域における「伝統

的な農法の保全」という取り組みを超え、世界農業遺産「能登の里山里海」の保全活用を通して、過疎・高齢化が進む地域の振興につなげる、そういう先進事例となるように努めていきたい。

里山創成ファンドでも生業の創出を支援

能登の地域資源に、世界農業遺産というブランドを付加し、新たな魅力を創造することで、都市住民をはじめ、企業、NPOなど多くの皆様方に能登に来ていただき、こうした方々による交流・体験・保全活動を通して、地域資源のさらなる魅力向上につなげていくような良い循環を作りだしたいと考えている。

このため、石川県では、この認定を大きなテコとして、認



日本海に面した白米千枚田（輪島市）



世界農業遺産認定を受けたオープニングイベントの様相

定後ただちに、羽咋市以北の四市四町や関係団体と里山里海を元気にする推進役として、「世界農業遺産活用実行委員会」を設立した。委員会では、地域資源を掘り起こし、磨きをかけ、里山里海の魅力を発信していくことで、交流人口の拡大や、里山里海の地域資源を活用した生業の創出を目指していく。

さらに、里山創成ファンドでも生業の創出を支援するなど、各市町と連携し、企業や団体など多様な主体の参画を得ながら、里山里海を元気にする取り組みを進め、能登はもちろん、県全体の活性化につなげていきたいと考えている。

地域に残る歴史遺跡を活かして

―地区への愛着と、支え合う連帯感を―



ふれあう下市の会会長 ● 二宮明久

財団法人地域活性化センターは、「合併市町村住民組織活性化支援事業」として、合併後に主たる事務所が置かれていない旧市町村の地域を活性化することを目的に、住民組織等が自主的・主体的に実施する事業を支援している。平成二十二年度に同事業を活用した「ふれあう下市の会」の取り組みを、同会の二宮明久会長にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

大分県由布市は、県のほぼ中央に位置し、大分市に近く、北は宇佐市と別府市、南は竹田市、西は玖珠郡に接した地域である。

当市は、大分川の源流にあたり、豊後富士と呼ばれる由布岳やくじゅう黒岳等の山々をはじめ、湯布院、湯平等の温泉があり、こうした豊かな自然を背景に米・ナシ・野菜等の農産物や木材、シイタケ等の林産物が生産されている。

また、平成十七年には挾間町、庄内町、湯布院町の三町が合併して、人口およそ三万六千人、面積およそ三万二千坪の由布市となった。

下市地区の現状と課題

古くから農業が盛んだった挾間町下市地区は、江戸時代、府内藩中郷下市組の中心の村として栄え、初瀬井路の安定した水路のお陰で米どころとして発展してきた。

下市は、市のつく地名のとおり、昔は市が開かれるなど古くからの集落で、府内(大分)への往還の道として多くの商家が軒を並べ、府内へ行く人、行商の人など多くの人々で賑わったと伝えられている。

道の両側には生活用水や防火用水としての水路があり、守り神として

の「市恵比寿」をはじめ、風よけの神「そばさん」など多くの祈りのための石像群が残っている。また、地区の伝統行事として、下市の鎮守様である下市八坂神社を出発し、地区住民の安全を願って家々を回る「荒神祭り」が毎年十二月に行われている。

さらに、戦後、日本の童話界で活躍し、昭和四十三年第二回吉川英治賞を受賞した童話・童謡作家の後藤梢根の生家が下市にあり、由布市では、毎年、童話の祭典「ならねっ子まつり」が開催されている。

昭和三十年代百戸程度であった住宅戸数も現

在では、戸数およそ四百戸、人口約千人で、県下でも比較的若い人が多い地区となっている。

こうした中で、当地区では、昔から住んでいる人々と新しく居住してきた人々とのいわゆる混住化社会が形成され、住民の暮らし方も多様化しており、互いの交流も以前に比べて少なくなる傾向にある。このため、当地区では、住民ニーズが多様化する中、いかにして住民が住みよいと感じる地域づくりを構築するかが大きな課題となっている。

特に、古くから地区に伝わる歴史や文化についても、昔は親から子へ、祖父母から孫へと受け継がれてきた。しかし、核家族化等が進む現在、なかなか思うようにいかないのが現実で、どのようにして守り、後世に

合併市町村住民組織活性化支援事業の概要

【事業概要】

地域自治組織、コミュニティ、NPO、自治会等が自主的・主体的に実施するソフト事業を支援し、合併後に主たる事務所が置かれていない旧市町村の地域を活性化することを目的とする。

【助成対象団体】

平成11年度以降に合併した市町村及び平成23年度に合併予定の市町村

【助成金額・助成率】

助成金額は、200万円が上限(平成22年度までは、300万円が上限)
助成率は、助成対象経費の100%以内

【交付団体】

平成22年度 35団体
平成23年度 25団体(予定)

【問い合わせ】

企画・コンサルタント業務課
電話番号 03-5202-6133

伝えるかが課題となっている。

事業の経緯と内容、成果

下市地区では、前述のような現状と課題を踏まえ、平成二十二年度に（財）地域活性化センターの支援事業を活用して「歴史遺跡を活かした下市ふれあいプロジェクト事業」に取り組みることとなった。

■事業の経緯

事業のきっかけの一つは、平成十年度、当時地区公民館長であった二宮寿氏が主体となって取り組んだ月一回発行の公民館報だった。この中には「下市今昔」と題して、地区古老の下市の昔話や地名の由来、地区に残る遺跡のいわれ等をまとめ、住民に広く紹介したことである。



下市歴史講演会



下市歴史遺跡案内板

カ年にかけて当地区が取り組んだ由布市の単独事業である「由布コミュニティ（地域の底力再生）事業」による地域活性化対策である。

特に、由布コミュニティ事業のスタート時には、多くの地区住民が公民館に集まり、下市の良いところは何か、問題や課題は何かなど、数回にわたり熱心な話し合いを行った。

その結果、「ふれあう下市・輝く未来」を事業のキャッチフレーズとして、歴史保全・文化伝承部会等の四つの部会に分かれ、各部会で具体的な事業計画を立てて実施し、住民同士のふれあひも図ることができた。

今回のプロジェクト事業においても、自治区役員や地区住民で組織する「ふれあう下市の会」が事業主体となり実施した。

特に、

事業の円滑化を図るため、由布コミュニティ事業と同様に、四つの部会（歴史公園整備、

歩こう会・研修旅行・研修会、案内マップ・看板作製・遺跡修理、祭り衣装製作・広報等）を設置し、それぞれに担当者を配置して事業を推進した。この結果、単年度の限られた期間であったが、各担当者の熱心な取り組みによって、この事業を何とか成功させることができた。

■事業の内容

下市の歴史を学びながら住民同士の交流を図るため、歴史遺跡に関する講演会等を開催した。この中では、地区の地層の歴史や昔の人々の暮らし方、初瀬井路の歴史等を専門家の話から学ぶとともに、古老の伝承による遺跡の調査やそれに関連する他地区の遺跡見学も行った。

また、下市にある歴史遺跡を下市の昔散策マップとして作成するとともに、歴史散策コースの設定や案内板の設置等を行った。さらに、下市八坂神社周辺を地域住民が愛着のもてるふれあいの場とするため、敷石の街道の復元をはじめ、散策歩道の整備、樹木の植栽、遺跡の補修等を行い、歴史公園として整備した。地区の伝統行事である荒神祭り等の充実を図るため、祭り衣装や幟、幕、音響機器等も整備した。

■事業の成果

この事業を通じて、地区住民の交

流が活発化するとともに、これまで語り継がれた下市の歴史・文化が冊子としてまとめられたことにより、後世にも伝承しやすくなった。

また、下市の昔散策案内板の設置や下市八坂神社周辺の整備等によって、遺跡の明示や歴史公園として位置づけができたことも大きな成果としてあげられる。

さらに、この事業の取り組みは、地元新聞等にも大きく掲載され、下市を訪れた人々から「下市は活気がある。下市はあかぬけた」などの声が聞かれるようになったことも、この事業の成果だと思っている。

今後の取り組み等

ふれあう下市の会が主体となつて行ったこの事業は、下市自治区に引き継がれることになった。自治区では、この成果を今後の地域活性化に活かすため、地元のボランティア組織などへの活動支援を行い、八坂神社周辺の整備や地域の環境保全等を推進することになっている。

また、歴史遺跡や案内板の維持管理や歴史文化の継承等については、新たに有志による「下市恵比寿の会」を設立し、恵比寿大笑い競演等のふれあい行事を通じて、後世への伝承と普及活動を行う計画である。

石積みみの棚田と板倉を活かしたまちづくり 種蔵に残された農村景観を次世代に伝える

飛騨市は、平成十六年二月一日に古川町、河合村、宮川村、神岡町の二町二村が合併して誕生した市である。岐阜県の最北端に位置し、周囲は三千メートルを超える北アルプスや飛騨山脈などの山々に囲まれ、年間を通して平均気温は摂氏一百度で、四季の移り変わりを肌で感じることができ、自然に恵まれた地域だ。

同市種蔵地区は、富山県境に位置し、石積みみの棚田と点在する板倉や古民家が織りなす日本の原風景とも

いふべき美しい農村景観が残っている。ここで棚田の景観保全を行い、後世に農村景観を残していくために活動している「種蔵を守り育む会」を訪ね、幅会長、藤白副会長、荒谷副会長を取材した。

美しい農村景観の整備を目指して

種蔵地区には、平成十三年十月に環境省「かおり風景百選」に選ばれた「種蔵棚田の雨上がりの石積み」があり、美しい農村景観の中に十二世帯二十三人が暮らしている。

過疎化と高齢化の進行により、同地区は、近い将来農作業はもろんのこと、共同体の維持すら困難な状況になることが危惧される「限界集落」であり、市内で最も存続が危ぶまれる集落の一つである。

このような危機的な状況の中、市では、平成十八年三月に同地区の農村景観の保全を図るため「種蔵地区

整備基本計画」を策定した。この計画の中で、市は体験型宿泊施設を整備することにより、都市との交流人口を増加させ、市への定住促進を図ることを目指した。

これと併せ、「何百年も種蔵地区に受け継がれてきた集落独自の貴重な歴史や文化、棚田、板倉などの農村景観を次世代に守り伝えていく」



石積みみの棚田と板倉の農村景観

との理念の下に、平成十八年七月に同地区や周辺地域の住民十一人が集まり「種蔵を守り育む会（以下、守り育む会）」を立ち上げた。

種蔵の農村景観を活かした取り組み

守り育む会の会員は現在十三人。市の職員ら七人のオブザーバーを加えた二十人で活動している。守り育む会の主な活動内容としては、①棚田の景観保全活動、②地域活性化に関するイベントの実施である。

棚田の景観保全活動には、様々なボランティア団体が加わり、棚田の草刈りや石積みみの修繕などの作業を行っている。作業実施後には、参加者と地域住民との交流を図ることを目的に、地元の食材を活用した昼食を無料で提供している。

今年九月にも、岐阜森林愛護隊の協力を得て、同地区周辺の大規模な下草刈り作業や石積みみの補修などの整備活動を実施する予定だ。

さらに、守り育む会では地域内の団体の協力を得て、夏まつりや新そばまつり、農作業体験などの地域活性化に関するイベントにも取り組んでいる。

地域に昔からある「宮川在来種 万波そば」という品種のそばを来訪者に食べてもらいたいという地域の

★ 団体プロフィール ★

設立年=平成18年7月

設立・運営主体=自主的組織

(コミュニティ組織)

代表者=幅 雅久

会員数=13人

<連絡先>

〒509-4423

岐阜県飛騨市宮川町林50-1

TEL 0577-63-2312



種蔵を守り育む会の荒谷副会長（左）、幅会長（中央）、藤白副会長（右）



新そばまつり

思いがきっかけで新そばまつりはスタートした。このまつりは、毎年十一月に開催されており、これまで五回開催されている。
なかでも水車小屋で粉をひいた「搗き屋そば（限定五十食）」が人気で、参加者からは「作りたてでそばのかおりが強く美味しい」と好評を得ている。

また、種蔵の農村景観の魅力を広く情報発信するために、第四回目から岐阜大学の学生の協力を得て、「たねくら携帯写真 コンテスト」が同時開催されている。

代々残る板倉を活用

前述した「種蔵地区整備基本計画」に基づき、市では、古民家を活用した交流拠点施設「板倉の宿 種蔵」を整備し、平成二十一年四月にオープンさせた。この施設の管理運営は、地元住民らで構成される株式会社たねくらが市から指定管理者に指定されていて、守り育む会も農村活動の体験などの面から支援を行っている。

この施設は、市内にあった木造二階建ての古民家一棟と板倉三棟を移築して、改装したものである。古民家には、囲炉裏付板の間やフロント、

台所、和洋四室（十三人収容）などがあり、板倉はそれぞれ独立した宿泊用のコテージ（十二人収容）となっている。

板倉とは、百年以上前に木材で建てられたものであり、穀物や貴重品などを保管した倉

である。この板倉には、先人の言い伝えとして「住む家を壊すようなことがあっても倉だけは守れ、倉は食べ物や種物を保存しておいて、家族の命を守るかけがえのない宝物やから」という言葉が残っている。

このようなことが言い伝えられ、今でも若者たちが職を求めて他の地区に移住する場合でも、住宅は解体処分していくが、倉だけはそのまま残していくという。

この施設は、現在四月から十一月までの八か月間営業しており、年間約七百人に利用されている。利用者のほとんどは県外の方であり、リピーターが半分くらいを占めている。この施設では、山菜や地元野菜を使った素朴な田舎料理を囲みながら地域住民との語らいを楽しむことができる、さらには山里ならではの生活文化も体験できるようになっている。

今後の展望

守り育む会は、これまでの取り組みの成果が広く評価され、平成二十二年一月に総務省の「平成二十一年度地域づくり総務大臣表彰（団体表彰）」を受賞した。

守り育む会では、集落の暮らしを尊重しながら遠来の客を招き入れ、

訪れた人の協力を得ながら地域の活力を取り戻し、種蔵に受け継がれている歴史や文化、棚田、板倉などの農村景観を次世代に守り伝えていくとしている。

「板倉の宿 種蔵」がオープンした当初、地域の中には、来訪者を迎え入れることに對して抵抗感を持つ住民もいたが、来訪者をもてなすうちに徐々に慣れ、自分たちから来訪者へ話かけることも多くなってきているという。

また、来訪者が増え、地域をほめられる機会も多くなり、住民の中には種蔵の良さを再認識したという人も出てきているようである。

同地区は高齢化率七〇%の過疎の集落であるため、守り育む会の活動に来訪者をいかに巻き込んでいけるかが今後の課題だという。

その課題を踏まえ、「今後も『板倉の宿 種蔵』を拠点に棚田や板倉を活かしたまちづくりを来訪者とともに実践していきたい」と、幅会長らは力強く語った。

種蔵独自の貴重な歴史や文化、棚田、板倉などの農村景観を次世代に伝えていく守り育む会の活動に今後注目していきたい。

編集委員 ● 山口正晴

お墓参りの奨励策にポイント付与

— 霊園活性化へポイントカード導入 —

本誌七月号で、自治体などに広がる新たなポイント制度を紹介しましたが、アイデアを駆使したポイントの事業対象はそれ以外にもさまざまです。昨春オープンした幕張霊園（千葉市花見川区）では、お墓参りにちなんだ「マイリポイント・カード」を導入し、墓園の活性化に役立てています。その狙いや背景を探りました。

（編集部）

「マイリポイント・カード」を発行している幕張霊園は、千葉市の臨海地区である幕張副都心に隣接する閑静な一角に位置する都市型霊園である。経営主体は、宗教法人の歓照寺（習志野市津田沼＝本門佛立宗）である。

この霊園では、檀家さんが墓参に訪れるたびに、三〇ポイントが付与されている。貯まったポイントは、墓参の必需品であるお線香・お花代、管理料などに使用できるため、評判は上々だ。付近に墓園は少なく、近隣住民のお墓に対するニーズがあっ

たため、開園当初の立地トラブルもなかったという。

今年三月には国際品質基準のISO9001を取得。幕張霊園の花見光司所長は、マイリポイントとこのISO取得を挙げ、「この霊園には日本初が二つもある」と語る。

誰もが先祖さまを敬う心は、持っているはずだが、春秋のお彼岸、夏のお盆と年三回程度のお墓参りが今では普通。このため「定期的に、幾度もお墓参りに来てほしい」というのが、花見所長の率直な思いだ。

ポイントサービスの利点は 利用者と霊園の双方に

そこで考え出されたのが、お参りインセンティブ（奨励策）ともいえる「マイリポイント・カード」で、開園時から導入した。メリットは利用者側と霊園側の双方にある。

利用者は、墓参のたびに三〇ポイントが付与される。一ポイント＝一円に換算。現金でお墓やお花、お供え物などを買った場合、価格の三〇程度のポイントが付く。桜の植樹も

可能で、これも対象になる。

お客さんがお花、お線香、墓前法要など幕張霊園で支払うすべての代金は、貯まったポイントで精算できる。毎日参拝すると、一・五平方メートルの最小区画の場合、年間管理料の九千九百円が浮く計算だ。

「墓地購入者のほぼ八割が地元在住者で、散歩がてら立ち寄る方も多い」という。ポイントは現金千円で一一〇ポイント（一〇％の割引）分を購入することもできる。お墓参りのキャッシュレス化である。

普段、それほど会えない親戚が集まる七回忌など、故人を偲ぶ法要には会食がつきもの。そんな時には、幕張霊園と提携するホテルニューオータニ幕張の食事券を購入すれば、一〇％のポイント加算がある。

二万円の食事券なら二千元が返還されることになる。霊園にお参りに来た六十歳代の男性は「お墓参りに来るのは当然だけど、ポイントが貯まるので張り合いもある」と語る。

霊園管理者側からみたメリットも大きい。お墓参りに訪れる利用者は管理事務所に立ち寄り、窓口でマイリカードを差し出して、IT機器でポイントを加算してもらおう。その際、「利用者と対面してコミュニケーションできることが、何よりです」と、花見所長は強調する。

お墓の「電子化」にも寄与

例えば、お墓に葬られている故人の三回忌、七回忌といった供養日の情報や管理料の通知など、利用者にとっても貴重な情報が得られる。また、炎天下に高齢者が参拝に来た場合でも、管理者が園内モニターで安全を確認できるし、必要な手助けもしやすい。

管理事務所を素通りしてしまう墓地が多い中、マイリカードの受け渡しという「ワンクッション」を入れることで、世間話を通じた、お墓管理の情報交換が可能となる。マイリカードは、故人の戒名から墓石工事の履歴などデータベースとなり、「お墓の電子化」も図れる。

来年春には、一年間でお墓参りの多かった人（家族）を表彰する「年間最多墓参者のお墓賞」を発表するという。同霊園の試みは、地域に根ざした霊園経営にあって新たなモデルとなりそうだ。



墓参で訪れた人が管理事務所でカードを渡す

★地域の話題を弊誌でご紹介します！

弊誌では、地方自治体やまちづくり団体のイベントや地域の取り組みなどを紹介する「地域トピックス」「北から南から」欄を設けています。

ししたら、編集部までご一報ください。

投稿の際の原稿の分量は、イベント関係であれば四百〜八百字程度で、写真や図なども掲載します。

提供いただいた情報は、原則として、原文に沿って掲載します。

これらの紹介欄には、自治体、まちづくり団体の担当者から寄稿いただいた記事ないし、編集部が作成した記事を掲載しています。

本欄にご紹介いただける話題性のあるイベントや活動などがあります。

また、まちづくりや地域活性化などの政策関係を紹介する記事であれば、一ページ（千二百字程度）ないし二ページ（二千四百字）の

スペースで掲載いたします。記事形式でなくても情報提供という形でかまいませんので、編集部までご相談ください。

【連絡先】

地域づくり編集部

Te103 (5202) 6139

fa x 03 (5202) 0755

メール harada@jcrd.jp ないし

harada@jcrd.jp

全国エコツーリズム大会in岩手にのへ ～雑穀文化を主テーマとしたエコツアーを実施～

岩手県の最北部に位置する二戸市では20年前から、地域の宝（資源）を掘り起こし、地域づくりや観光振興にいかす活動を「宝探し」と命名し、地域の担い手と共に取り組んできました。

この活動の成果をエコツアーという形で発信し、今後の持続可能な地域づくりに向けた課題等を話し合う場として主題の大会を開催します。

寒冷な地域ゆえに発達した雑穀の食文化を通して、東北の人々の自然と共に生きてきた暮らし、知恵を垣間見ることのできる機会です。二戸市は内陸寄りですが、沿岸部の被災地応援ツアーも実施します。



■日程

10月21日（金）：シンポジウム・交流会

基調講演：C.W.ニコル氏（作家、環境保護活動家、日本エコツーリズム協会アドバイザー）

問題提起：田川博己（株式会社JTB代表取締役社長・日本エコツーリズム協会副会長）

22日（土）：エコツアー、被災地応援ツアーも実施

雑穀を使った食や、奥州街道・戦国武将などの歴史、巨樹などの宝を活用したエコツアーを6コースご用意。

23日（日）：エコツアー体験報告・総括セッション

■場所：岩手県二戸市 二戸市民文化会館ほか

■参加費：未定

■主催：二戸市・全国エコツーリズム大会in岩手にのへ実行委員会

■共催：NPO法人日本エコツーリズム協会（JES）

■お問合せ：実行委員会事務局（二戸市役所）Tel 0195-23-3111（代）

書籍紹介

森林カメラ ～美しい森といのちの物語

名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授（環境マネジメント）

香坂 玲・著

清水弘文堂書房 1600円＋税

世界各地の「美しい森林」の背景には、森林と共生する地域の産業や人びとの生活習慣といった営みが息づいている。その一方で、森林の喪失による気候変動や生物多様性の損失などが大きな政治テーマとなり、「美しい森と生きもののいる風景」の存続が危ぶまれている。

著者は名古屋市で昨年開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の支援実行委員会アドバイザーを務めた。本書では「美しい森と生きもののいる風景」とは何なのかを探り、森林環境、生物多様性、それを取り巻く人間の文化や活動について、森を旅しながら考えていく。いわば「森を題材にした小さな旅行案内の書」という。

紹介する外国の豊富な事例は、企業が生物多様性とビジネスを融合する際のヒントとなる地域社会への貢献、情報開示などのCSR、ソーシャルビジネスなどさまざまな領域で示唆に富む。

森林カメラ

美しい森といのちの物語

著者 香坂 玲

Will gaze : Imagery and myths from forests





唐津市長 ● 坂井 俊之

「市民力」を活かした、 元気がでるまちづくり

東日本大震災で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。また、福島原発での事故が、一日でも早く収束することをお祈りいたしますとともに、原発に隣接している市として、市民が安心して暮らせる環境が戻ってくることを願っております。

唐津市は、九州の西北部にあり、九州最大の都市、またアジアのゲートウェイであります福岡市までは、一時間圏内に位置し、地域資源として「歴史」「自然」「文化」があげられます。「歴史」は古く、魏志倭人伝に「末盧国」として記述されており、豊臣秀吉により築城された名護屋城跡があります。近代においては、石炭の積出港として我が国の繁栄を支えてきました。

白砂青松で知られる虹の松原を代表に「自然」豊かな地域で、山村特有の自然景観を有する檜原湿原、変化に富んだリアス式海岸一帯にあるいろは島など、海、山、川と多彩な美しさがあります。

多くの愛好者を持つている唐津焼は、全国に誇れる「文化」であり、東京駅を設計した建築家辰野金吾は唐津出身で、彼の監修による旧唐津銀行が現存しています。

このように、唐津には「歴史」「自然」「文化」と多くの地域資源がありますが、それよりも生活者である市民の方々の「市民力」が唐津市の最大の魅力であり、宝だと思っております。

唐津におけるまちづくりは、この地域で豊かに安心して暮らすために、この「市民力」と地域資源を活かし、課題を解決していくことにしています。

そのためには、様々な仕掛けを計画しています。

まずは、ふるさと集落活性化事業が挙げられます。市中心部から遠く、将来、集落の維持が困難な地域の方々の意向を調査し、将来の地域のあるべき姿を検討することとしています。これを基に、市民力を引き出し、地域の維持、あるいは活性化に結びつけようとするものです。

また、がんばる商店街等支援事業として、中心市街地以外の地域で頑張っている商店街をてこ入れすること、まちとしての機能を維持し、ひいては買い物難民対策にも役立つことを狙っています。

市民力をさらに磨きあげ、地域のリーダー的人材を養成するため、地域コミュニケーション養成講座を開催しています。これは地域で一目置かれる立場の人に必要な「聞く力」「説明する力」「理念力」を養成するものです。

座学だけではなく、地域の魅力、課題をテーマとした映画づくりをツールとして実施し、制作過程において、地域の気づきを体験して頂く内容となっています。

さらに、このように地域で頑張っている方や地域を、側面から応援していく仕組みとして「市民サポーター」を設置します。これは、地域でのちょっとした話題や出来事を市に報告していただき、その情報をホームページや市が持っているテレビチャンネルで放送することによって、地域の自慢や話題づくりに役立てて頂くことにしています。

唐津には、ゆるキャラ「唐ワンくん」がいます。唐津城築城四百年を記念したマスコットキャラクターで、ゆるさ加減では他のゆるキャラを圧倒するものがあり、全国的にも人気があります。この人気を活用し観光宣伝や食育などで活躍し、産業振興だけではなく、子どもたちの健全育成のために頑張っています。これも唐津の市民力の一つではないでしょうか。

今、日本は、その真価を問われています。また唐津市も原発に隣接している市として、これからのエネルギーのあり方を含め、その動向が注目されています。市民力を信じ、協働しながら、市民の安心・安全を確保し、元気がでるまちとして邁進してまいります。

これからの唐津市の取り組みにご期待下さい。

湊・酒田 粋な文化に出会うまち



■酒田港外港地区の国際ターミナル。奥の山が鳥海山（標高2,236m）。

酒田市は山形県の北西部に位置し、最上川と日本海が出会う港町です。北には鳥海山、南には月山を望み、中央には庄内平野が広がり、酒田港から39kmの沖合には県唯一の離島「飛島」があるなど山から海まで自然の豊かなところでもあります。

酒田は、江戸時代に西廻り航路が整備されたことで北前船交易が盛んになりました。町を歩けば当時の繁栄を偲ばせる建物や名所を目にすることができます。この江戸時代に発展した酒田港は、現在も重点港湾として指定され、その役割が今後も期待されています。

さて、夏の酒田の味覚の代表は庄内砂丘メロンです。甘くみずみずしい味わいは暑い夏に涼しさを与えてくれます。また、酒田の食と言えば酒田ラーメンも特徴的です。自家製麺比率は自称日本一。醤油味で澄んだ魚介系のスープで味わうラーメンは美味。

長い歴史と豊かな自然に育まれ、さらには美味しい味覚もそろっている酒田に来てくれのお〜（来てね〜の意）。



■廻船問屋跡の旧燈屋。その繁栄ぶりは井原西鶴の日本永代蔵にも記されるほど。



■眺海の森から見る夕陽。庄内平野を流れる最上川と水田。



■本間家旧本邸。武家屋敷と商家造りの二つの建築様式が一体になっている全国にも例のない建物。



■日和山公園に展示されている千石船の模型（2分の1スケール）。



■山居倉庫とケヤキ並木。酒田を代表する観光客に人気のスポット。



■日本三大つるし飾りの「傘福」。旧料亭の山王くらぶに展示している。



■知る人ぞ知る酒田ラーメン。特にワンタンメンは透き通るような薄いワンタンが酒田の味。

通信センター

地域づくりコーディネーター研修会を開催します！

地域づくり団体全国協議会では、下記の日程で「地域づくりコーディネーター研修会」を開催します。震災復興支援活動において、地域づくりコーディネーターの在り方や果たすべき役割等について探ります。奮ってご参加ください。

1. 日時 2011年9月1日（木）13：30から
9月2日（金）12：00まで
2. 場 所 TKP仙台カンファレンスセンター
（宮城県仙台市青葉区花京院1丁目2-3）
3. 内 容 震災復興支援活動における地域づくりコーディネーターの
在り方や果たすべき役割等について
対 象 各都道府県協議会担当者及び各都道府県の地域づくりコー
ディネーター等
定 員 70名（但し、定員になり次第、締め切らせていただきます。）
締切日 平成23年8月10日（水）
4. 費 用 無料（交流会参加の場合は有償）
【問合せ先】 研修交流課 03-5202-6135
＊詳しくは財団法人地域活性化センターのホームページをご覧ください。



6カ国の農村女性政策担当が研修～自治体アンテナショップのマネジメントを学ぶ～

地域活性化センターは6月30日、（社）農山漁村女性・生活活動支援協会が実施する研修「農村女性能力向上」（JICA委託事業）を受け入れました。アフガニスタン、アルバニア、タジキスタン、ブルキナファソ、フィジー、レソト、ナイジェリア6カ国の農村女性政策担当官が、自治体アンテナショップ、地域情報の受発信について研修しました。

その後、八重洲・日本橋周辺のアンテナショップを

視察。おいでませ山口館（山口県）、京都館（京都市）、福島県八重洲観光交流館（福島県）を訪問し、流通形態、商品パッケージ、陳列、顧客ニーズの調査方法などマネジメントについて質問が相次ぎました。

35度を超える猛暑の中での視察でしたが、京都館では冷やした緑茶をご馳走になり、おもてなしの心に触れました。



ふるさと情報コーナーを視察



京都館でおもてなしを学ぶ

★日本橋プラザビルイベントスペース

8月

- 8月4日(木)～5日(金)
かつらぎ町観光協会(和歌山県)
『フルーツいっぱい! かつらぎ町観光PR』
- 8月25日(木)～26日(金)
片品村(群馬県)
『尾瀬の郷・片品村 農産物&グリーン・ツーリズムフェア』



(写真)

- 1 6月1日～2日北海道知床らうす昆布・海洋深層水フェア(羅臼町)
- 2 6月20日～21日とことん南泉州観光キャンペーンキャラバン(華やいで大阪・南泉州キャンペーン推進協議会)
- 3 6月8日甲府観光物産展(甲府市観光協会)
- 4 6月27日中央区さくらんぼ祭(東根市)
- 5 6月30日～7月1日川崎市多摩区・生田緑地キャンペーン(川崎市経済労働局)



【編集後記】

▼モノづくりへの関心とともに、工場の生産現場や伝統産業を支える「匠の技」などを見聞する「産業観光」が人気を集めています。観光立国を目指し、地域経済の活性化にもつなげたい自治体や企業を取り組みにも力が入っています。今月号はこれらに焦点を当て、「産業観光によるまちづくり」を特集しました。

▼観光資源といっても、その対象はさまざま。大自然やまちの景観、名所・旧跡などに限らず、産業遺産、工場や工房などの生産現場から農水産業の現場まで、いまや広範囲です。「産業観光」の言葉の産みの親でもある須田寛・JR東海相談役は、このうち産業観光の将来展望について、外国人観光客向けメニューを増やすこと、広域・複合的な産業観光の展開、「ひとづくり」「くづくり」につながる教育活動との連携、などを課題に挙げています。

▼産業観光を通じたまちづくりに積極的に取り組む自治体や団体を表彰する「産業観光まちづくり大賞」(全国産業観光推進協議会主催)も今年で創設五年目とのこと。十月には函館市で「全国産業観光フォーラム」の開催が予定されており、今後も注目されます。

▼国連食糧農業機関(FAO)が六月、「世界農業遺産」の対象地域として、先進国では初めて新潟県佐渡島と石川県能登半島を認定しました。ユネスコが認定する世界遺産に比べると報道は地味でしたが、こちらも朗報です。両地域の担当者から、反響と今後の意気込みを寄せていただきました。(原田)

【9月号予告】
特集II 小規模発電とまちづくり(仮)

地域づくり8月号

2011年8月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

宝くじは、
地方自治体の公共事業等に
幅広く使われています。

NEW!

ワクワク、
続々。



宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。